

民族の興亡が世界史をどう変えたか

世界地図

から

歴史を読む方法



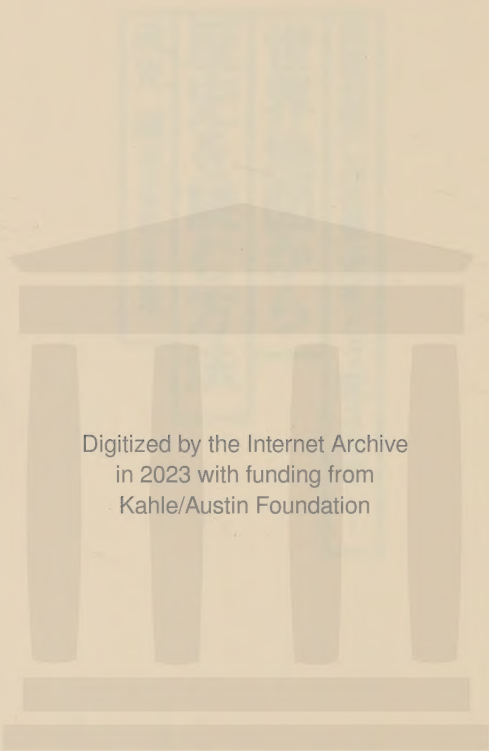
明治学院大学教授
武光誠

世界史を形づくってきたのは、
民族の大移動や抗争の歴史である。
各地域、各時代の民族たちはなにゆえに、その土地で、
激しい興亡を繰り返してきたのか。地図という
新たな視点を用いて、より空間的に
民族の歴史像をとらえ、世界史を読み直す本。



KAWADE 夢新

UK-271-832



Digitized by the Internet Archive
in 2023 with funding from
Kahle/Austin Foundation



民族の興亡が世界史をどう変えたか――

世界地図から

歴史を読む方法

武光 誠 明治学院大学教授



河出書房新社



国境に刻まれた
民族盛衰の歴史を探る——まえがき

世界地図を広げたり、地球儀を回していると、私たちは知らず知らずのうちに、いまの世界の国々のあり方を、決まりきったもののよう受け入れてしまう。

しかし、世界地図はつねに変わりつづけている。たとえば、日本の北方には大国ロシアがあるが、そこはわずか一〇年ほど前までは、ロシアよりもさらに巨大なソビエト連邦の一部であった。旧ソビエト連邦は、公式に登録された民族数だけで、一〇四を数える多民族国家であった。現在、民族自決の名のもとに、旧ソビエト連邦内を多くの国に分断する動きがつづいてる。

ユーゴスラビアという多民族国家が解体して、いくつもの民族紛争が起こったことも、私たちの記憶に新しい。

五〇年、一〇〇年単位でみれば、世界地図は大きく変わっている。日本が、樺太南部、千島、台湾やマリアナ諸島をはじめとする南方の島々を領有していたのは、わずか五十数



1章

弱小の民族が 広大な領土を制覇しえた秘密

世界地図から探る、民族消長の果てしなき変遷

16

なぜ民族紛争が後を絶たないのか／16 支配する民族と支配される民族の興亡／17
抗争がつくった民族の分布／21

中国の国境の推移と根深い民族問題

22

なぜ複雑な多民族国家になったのか／22 領土がこれだけ広大になったわけ／23
中国の主要民族・漢族の実態とは／25

多様な民族からなるインドが、なぜ一つにまとまったのか

29

言語、宗教、身分が生んだ対立の構造／29 小勢力分立の時代からインド統一へ／30
イギリス支配とそれからの独立／32

小勢力モスクワ公国が大帝ロシアとなった経緯とは

33

ロシア国内の多彩な民族分布とは／33 モスクワ帝国はこうして生まれた／34

年前のことである。そして、そのころには世界のいたるところにイギリス領があつた。東南アジアやアフリカには、ほとんど独立国がみられないありさまであつた。

こういったことを考えると、五〇年単位につくつた何点もの世界地図をならべてみるだけで、世界史の興味深い事柄が多く浮かび上がってくるのがわかる。地図から世界史をみるのは面白い。

民族の発展や被征服があり、モンゴル、イスラム、オスマントルコなどの大帝国が誕生しては滅亡していった。個々の民族の勢力圏や国境は、時代ごとにめまぐるしく変わっている。

そして、そのような歴史の転換の場には、名前のよく知られた興味深い英雄がいる。ヨーロッパからオリエントにわたる大帝国を築いたアレクサンダー大王、エジプトの古代王国の最後の君主となつたクレオパトラなど。地図からみた歴史の背後には、多くの人物の営みがあるのである。

これから、民族の攻防を中心に、地図を手がかりにした歴史を描いていこうと思う。これによつて現代の社会をつくり上げてきた過去の人々の姿がみえてくるであろう。

2
章

強国の脅威から文化と誇りを 死守した小国の苦闘

世界に広がるトルコ族の発祥／61 中国からイスラムまで領有したトルコ族の発展／62
ローマ帝国を滅ぼしたオスマントルコ／64

イスラム勢力に侵略されながら独自の伝統を守ったイラン人 66

イランが多民族国家になったわけ／66 アケメネス朝ペルシアの後裔・イラン人／67
ササン朝以後のペルシア／69

ヨーロッパには、なぜいくつもの小国があるのか 72

ヨーロッパに小国が存続するわけは？／72 ルクセンブルクとモナコの成り立ち／73
サンマリノとマルタが独立できた理由／75

三邦から発展したスイスが、永世中立国として一國を成した理由とは 77

原初三邦によるスイスの誕生／77 現在のスイス領はいつ定まったか／78
宗教戦争から武装中立の宣言へ／79

バチカン市国が世界最小の国として残された理由 81

世界最小の国・バチカン市国とは／81 ローマ教皇領の成立／82
なぜ教皇領はこんなに小さくなったのか／83

大帝国を築くまでの道すじ／35

ヨーロッパ文明の基礎をつくったローマ帝国の大侵攻 39

“すべての道はローマに通ず”／39 大帝国になるきつかけとなったポエニ戦争／40
アジア・ヨーロッパの地図を塗り替えたローマ帝国／41

世界史上最大の領土を支配したモンゴル帝国の盛衰 43

“モンゴル族”はどの民族を指すのか／43 チンギス・ハンはどのように領土を拡大したのか／44
なぜ大帝国は滅んだか／46

地図が示すアメリカ合衆国発展のいきさつ 48

多民族国家としてのアメリカ／48 列強の植民地化を地図で見る／49
現在のアメリカの形はいつ整ったのか／51

フランス人の民族意識は、隣国との抗争により高められた 52

フランス民族のルーツは何か／52 フランク王国の領土の拡大／54
戦争が民族意識を高め、国境を確定した／55

ハプスブルク家が手に入れた神聖ローマ帝国の領土 57

神聖ローマ皇帝が支配した領域は？／57 オーストリアを本拠にするハプスブルク家の成長／58
スペインまで併せた大帝国の出現／59

ローマ帝国を滅亡させたオスマントルコの広域支配 61

イスラム教圏「アラブ」の定義とは／104 スンニー派とシーア派との根強い対立／105
アラブ世界を再編する／107

パレスチナで繰り広げられるユダヤ人とアラブ人の興亡 109

イスラエルとPLOの戦い／109 ユダヤ人迫害の歴史とは／110
パレスチナの混乱をもたらしたのは何か／112

古代フェニキア王国の末裔レバノンの宗教紛争 114

フェニキアの繁栄とその勢力圏は？／114 レバノンをキリスト教国にする地理的理由／115
あいつぐ国内の宗教戦争／117

ユーゴ紛争の火種となつた大国2国の争いとは 118

ヨーロッパの火薬庫・バルカン半島／118 オスマントルコとオーストリアの争奪戦／119
キリスト教とイスラム教との深刻な対立／122

なぜドイツ統一は他の国より遅れたのか 123

ドイツで起きた最後の宗教戦争／123 三十年戦争とその終結／124
ドイツ統一への歩み／125

インドとパキスタンの長期にわたる紛争の火種は何か 127

ヒンズー教とイスラム教の複雑な抗争／127 第一次印・パ戦争とその後／129
パンジャーブ州のシーク教をめぐる紛争とは／130

小国デンマークをめづつて繰り広げられた北欧三国の抗争 85

デンマークによる北欧一帯の支配／86 中世における北欧の情勢とは／86
プロシアとの戦いでもたらされたものとは／87

アイルランドが独立国となるまでの苦難の道のり 89

五つの地域から成る「イギリス世界」／89 ケルト人とゲルマン民族によるイギリス世界の成立／90
スコットランド併合と北アイルランド紛争／91

東南アジアの小勢力カンボジアが独自の文化を守れたわけ 94

カンボジアが民族国家として団結できたわけ／94 カンボジアの起源・クメール朝の成立／95
隣国の脅威とフランス支配からの独立／96

多くの少数民族から成るミャンマーの成り立ち 98

一二〇余りの少数民族をめぐる難問とは／98 ビルマ統一までの民族抗争の展開／100
なぜ少数民族の反政府活動が続くのか／101

宗教対立から国境線を 争った民族摩擦の爪痕

スンニ派とシーア派の抗争からアラブ世界の歴史を探る

長年放っておかれた南太平洋／151 欧米諸国による南洋支配／152
南太平洋を悩ますさまざまな問題／153

大国に迫害され続けた少数民族ジブシーの歴史 154

ジブシーとはどういう民族か／154 ジブシーの発祥はどこか／155
ジブシー迫害の歴史とその理由／156

なぜクルド人は祖国をもたない民族となつたのか 159

クルド人が国家を認められず分散させられたわけ／159 クルド人分裂の悲劇の種がまかれた／161
三国で繰り広げられるクルド人の独立運動／163

南米諸国の均質的な文化はどのように作られたか 164

南米の人種分布からわかることは？／164 大国による国境の線引き／165
ペルー・エクアドル紛争の背景とは／166

幾度もの侵略によつてエジプトはどう変わつていったのか 168

プトレマイオス朝の繁栄がもたらしたものの／168 なぜローマ帝国に侵略されたのか／169
イスラム勢力、イギリスによる侵略／170

大国ロシア支配がもたらしたタタール人の悲劇とは 172

ロシアに拡大したモンゴル勢力／172 「クリミア・タタール人」の誕生／173
ロシアによる併合が引き起こした民族問題／175

スリランカが抱える根深い宗教対立の原因は？

132

ヨーロッパ人のセイロン進出／132 セイロンを巡る主導権争い／133
シンハラ人とタミル人との対立の始まり／134

最古のキリスト教国を興したアルメニアが、なぜ世界で孤立しているのか

136

アルメニアが最古のキリスト教国となったわけ／136 イスラムに対抗し、独自の宗教を守る／137
オスマントルコとロシアの支配政策／139



列強に挟まれ、翻弄された 悲劇の民族たち

南北を強者にはさまれた朝鮮半島の悲劇

142

朝鮮文化を生み出した民族とは／142 新羅による半島統一／143
李子朝鮮から南北分断までの勢力争い／145

中国の諸王朝と東トルキスタンとの抗争の経緯

147

中国はなぜ西域支配をもくろんだのか／147 西域を旅した玄奘のルート／148
ウイグル自治区の複雑な独立紛争／149

欧米列強の分割がもたらした太平洋の諸問題とは

151

西トルキスタンとカフカスに見るソビエト連邦が残した民族問題

195

諸民族とロシア人との紛争／195 ウズベキスタンとタジキスタンの勢力対立／196
ロシアのグルジア、チエチエンへの弾圧とは／199

なぜ民族はお互い抗争し合うのか

200

冷戦後の八つの文明圏とは／200 「民族」とはいったい何か／201
民族問題の終結に向けて／203



今に続く民族紛争の火種を 世界地図から読み解く

民族対立の歴史はどのようにつくられたのか

178

民族と国家の発生の理由／178 四大文明はどこで起こったか／180
古代オリエントの民族対立とは／181

フツ族とツチ族の果てしない戦いの理由

183

少数民族が多数派民族を支配する国／183 ルワンダ王国から植民地時代まで／185
民族紛争が長期化するわけ／186

なぜ中国はチベットの独立を認めないのか

187

漢族とチベット人との対立／187 チベットの起源と繁栄の歴史／188
地図から読むチベットの独立運動／190

多民族国家ならではのインドネシアの苦悩とは

191

インドネシアの混乱の原因／191 シュトリーヴィジャヤ王国が繁栄した理由とは／192
オランダ支配とジャワ族の軍事支配／193

1
章

弱小の民族が
広大な領土を制覇しえた秘密

立の構図の中で押さえこまれていたものが、一気に表面化したものといえる。一国内にくつもの民族が併立する国も多く、民族紛争はときには大きな内戦に発展し、場合によっては内戦が大国の介入をもたらす。

現在の多様な民族紛争は、多くの民族が地球上で共存共栄をはかるために、通り抜けねばならぬ障害物のように思える。

●支配する民族と支配される民族の興亡

民族紛争は、近代になって起こったものではない。きわめて古い時代から、民族間の対立はあった。

簡単にいえば、強い民族が力を用いて弱い民族を支配する。このことの繰り返し、世界史の大きな流れをつくってきたといえる。古代オリエントと地中海世界では、アケメネス朝ペルシア、アレキサンダーの帝国（マケドニア）、ローマ帝国などがつきつぎに興おこつて、多くの民族を征服して強国をつくった。

東洋の強者は中国であった。聖徳太子、中大兄皇子なかのおおえのみこ、天武天皇てんむらのすぐれた指導者たちが出なければ、日本は一時期、唐帝国の支配を受けていたかもしれない。

世界地図から探る 民族消長の果てしなき変遷

●なぜ民族紛争が後を絶たないのか

第二次世界大戦のあと、人々の平和を求める声が強まった。戦後いくつかの小規模な戦争はあったが、第三次世界大戦はいまのところ起きていない。

第二次大戦による全体主義国家の没落の後、アメリカを中心とする自由主義陣営と、ソビエト連邦を指導者とする社会主義陣営との対立がはじまった。いわゆる「東西冷戦」であるが、この抗争は両者の全面戦争にはいたらず、にらみ合いの形で推移した。

そして、ソビエト連邦の崩壊によって、東西の対立がおさまった。このことにより、今後は国家どうしの戦争は、よほどのことがない限り起こらないであろうと考えられるようになった。

それに代わって近年では、各地でしきりに民族紛争が起きている。それは東西陣営の対

民族の分布





も独自の伝統を守りつづけた者もいた。

●抗争がつくった民族の分布

民族の消長をぬきに、世界史は語れないのだが、民族とはきわめてあいまいな概念である。体型が明らかに違う人種の区別はわかりやすいが、一つの人種が、言語、宗教、風習などを異にする多くの民族に分かれる。コーカソイド（白人）ならばイギリス人、フランス人など多くのものがある。

人種を超えて広がる宗教や文化もあり、アメリカのようにコーカソイド、コンゴイド（黒人）などいくつもの人種とその混血が集まってできた国もある。

今日の世界には五〇〇〇〇〇六〇〇〇から一万数千の民族があるといわれている。もっとも、その境界にはあいまいな部分もある。それでも、①共通の祖先、②同一文化、③宗教、④人種、⑤言語などの要素のいくつかを共有する集団を、民族とよびうると考えられている。

民族を系統別にまとめた図を18〜19ページにあげたが、今日の民族の分布は、長期の民族間の抗争を通じて歴史的につくられたのである。

一方、ゲルマン民族のローマ領への侵入が、ヨーロッパに中世封建制をもたらしたのだが、中世の強者はヨーロッパ人でも中国人でもなく、イスラム教を信奉するサラセン帝国と、騎馬民族であるモンゴル帝国であった。ついで、ヨーロッパに絶対主義王制がつけられた近世に入ると、イギリス人、フランス人などの地球規模の活動がはじまる。

そして、近代の開始とともに植民地支配の全盛期が訪れた。第一次世界大戦後、民族自決が叫ばれるようになり、第二次世界大戦をきっかけに、列強の植民地支配は後退して現在にいたっている。

古代には言語や習俗を共有する集団が、数万あるいはそれ以上はいたであろう。それは、今日の民族のもとになるものであるが、民族とよべるほど有力ではなく、部族（氏族連合）よりは大きいという程度の集団であった。

たとえば古代の日本の場合、ヤマト、アズマ、エミシの三集団がおり、それらが後に日本人としてまとまった。

そのような集団の中から、他者を支配する形で国家をつくった者がいた。そして、国家間の勢力交代がめまぐるしくなされた。そういった歴史の中で、よりよい地位や生活を求めて支配者の集団に同化した集団もいれば、ユダヤ人やアルメニア人のように国を失って

中国における民族問題の根底には、古代以来の漢族対非漢族の根深い対立がある。そして、今日の中国の非漢族に、中国文化を受け入れて漢族と同化しようという動きと、漢族支配から独立しようとする運動とが複雑にからみ合っている。

●領土がこれだけ広大になったわけ

今日の中国の複雑な民族問題のものは、古代以来の中国の皇帝支配のもとでとられた中華思想から来るものである。漢族は、なぜ漢族だけの国家をつくらなかったのだろうか。

それは、歴代の王朝が、中国人を世界でもっとも優秀な民族とみたうえで、自分たちが周囲の異民族を教化しなければならぬと考えたからである。かれらは、儒教にもとづいて中国皇帝を世界の頂点におき、他民族を中国の属国として扱い、かれらに先進文化を分け与えた。三世紀の日本にいた邪馬台国やまたいこくの女王卑弥呼ひみこが、中国の魏朝ぎに従って親魏倭王しんぎわおうの称号を与えられたことはよく知られている。そして、中国の諸王朝は、文化の受容を通じて中国化した周辺の小国をつぎつぎに武力征服して中国の領域に組み込んだ。

中国で最初にそのような拡大政策をとったのが、紀元前二世紀に全盛を迎えた前漢朝である。武帝ぶていなどの征服活動によって、前漢朝ぜんかんの領域は東は朝鮮半島北部から西はタリム盆

中国の国境の推移と 根深い民族問題

●なぜ複雑な多民族国家になったのか

一〇億を超える人口をかかえる共産党指導下の中国は、多民族国家であるとともに、漢族（中国人）支配が行なわれる国である。中国全土には五六の民族がいるが、中国の人口の約九一パーセントは漢族である。一九九〇年度の国勢調査による、中国の主な民族の分布とその人口を記しておこう（24～25ページ参照）。

中国の行政単位は、二二省（台湾を加えれば二三省）、四中央直轄地、五自治区から成る。一定規模の少数民族の居住地が、内モンゴル、新疆ウイグル、しんちあん新疆ウイグル、こわんしーちよわん広西壮族、にしあほい寧夏回族、チベットの自治区とされるのである。

少数民族にある程度の自治を認めようとする政策であるが、チベットと新疆ウイグルの自治区では、反政府暴動が頻発ひんぱつしている。この詳細についてはあとで述べよう。

中国の民族分布

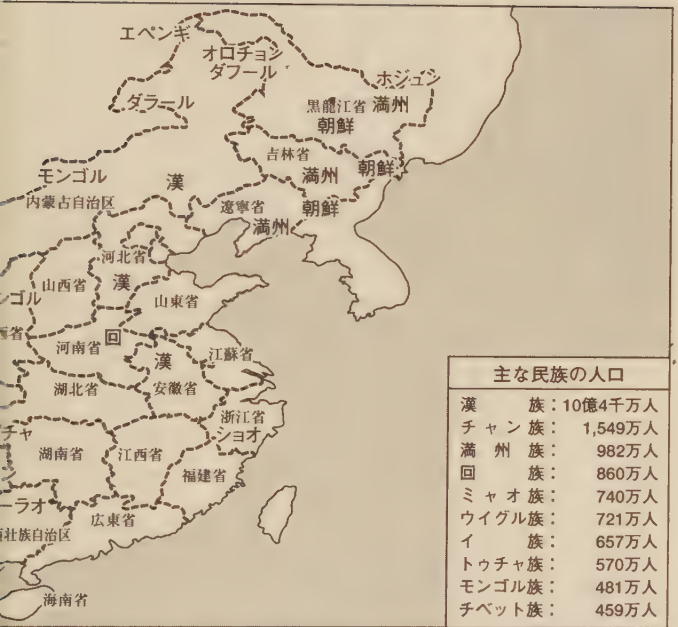


立していたチベットまで、中国の領域に組み込まれている。

●中国の主要民族・漢族の実態とは

清朝の宮廷の貴族は満州族であつたが、そのころの漢族居住地で実権を握っていた地主層は漢族であつた。そして、二〇世紀はじめの中国革命によつて漢族支配が回復された。

しかし、世界最大の民族である漢族の実態は複雑である。漢族自身が多様性をもつからである。かれらは中国語を用い漢字を使う点で共通性をもつが、中



地のあたりにいたる範圍まで広がった。後漢代以降、中国の勢力は後退するが、七、八世紀に唐朝が興り、大帝國を築いた。このとき、中国の領域は前漢代のそれよりさらに西方に広がり、アラル海沿岸にまで達した。

唐朝の滅亡後、中国勢力は後退する。漢族の民族国家とよぶべき宋朝や明朝の領域は比較的狭く、それは今日の漢族の居住範圍にほぼ対応する。

そして、満州族がたてた清朝の領域が、ほぼ今日の中国に相当する。清代には、前漢代に独

漢族の多い地域



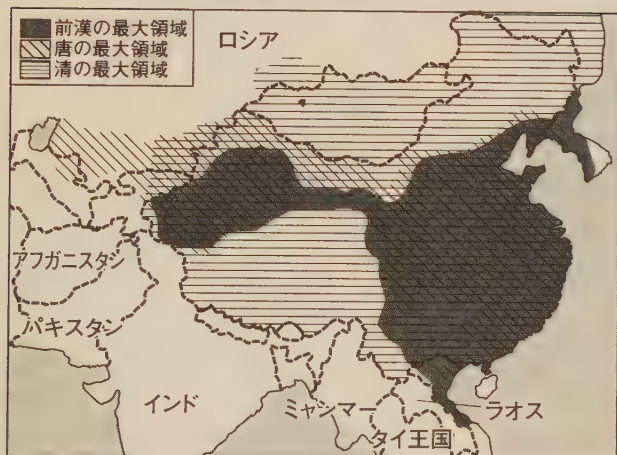
(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

国語は多くの方言に分かれる。しかも、北部の漢族は背が高く麺類を中心とした食事を取り、土でつくった家を用いる。それに対し南部の漢族は背が低く米食で木の家に住む。

漢族自体が、長い年月をかけて諸民族が融合してつくられたものであるのだ。黄河流域の中原を求めて集まったさまざまなアジア系の民族が、共通の文化を有しつつ、中国全体をまとめる王朝の支配を受けた。

この状況が長くつづいたことによって、巨大な複合民族である漢族がつけられていったといえる。今日の中国の住民のふるさとは、全アジアに広がる。しかし、北のアジア人と南のアジア人が中国で混血し、中国をふるさとと考える多くの人をつくっていった。

中国各王朝ごとの勢力範囲(1)



中国各王朝ごとの勢力範囲(2)



多様な民族からなるインドが なぜ一つにまとまったのか

●言語、宗教、身分が生んだ対立の構造

アジア南部の「インド亜大陸」などとよばれる地域は、古代から現在にいたるまで独自の文化をもちつづけた特殊な地域である。仏教発祥の地として知られる地で、現在そこはインド、パキスタン、バングラデシュの三国に分かれている。

この三つの国の人口を合わせると、約一二億にも達する。インド人は北部の比較的多数のインド・ヨーロッパ語族であるアーリア人と、南部の少数のアジア系のドラヴィダ人からなり、両者の混血も多い。色は黒いが、インド人の多くは白人の流れをくむ。インドでは言語、宗教、カースト、地域の多様性からくる対立抗争が絶えない。

主な言語だけでも、次のページの図に示したようにきわめて多い。インドでは、ヒンデイ語を用いる者が支配層の多くを占めていることに対する、他の語族の不満が強いといわ

そのような中国人は、今後も独自の文化を共有する有力な集団として歴史を動かしているであろう。

ここで私たちは、漢族の国が中国であるのか、あるいは漢族は中国人という近代に生み出された集団の中の多数派にすぎないのかを、選択せざるを得なくなりつつある。それによって、中国との外交政策がまったく異なるものになるからである。

漢族の王朝が発展した漢代、唐代には、漢族は中華思想にもとづき、そのとき中国の支配下に組み入れられた異民族を厳しく差別した。

それに対し、清朝は満州族を漢族の上位におき、漢族に満州化をせまった。そのころの中国人が、満州族の風習である弁髪べんぱつを強制されたことはよく知られている。頭頂をそり、髪を後ろで束ねた弁髪の男性の絵は、近代以前の中国人をあらわすものとして、私たちになじみ深い。

そして、第二次世界大戦後に共産党が政権を握ったことによって、はじめて中国人はすべて平等だとする方針が定まった。このあと、共産党は漢族と異民族との同化政策をすすめている。たとえば、イギリス系の人間が中心になってはいるが新たにアメリカ人が生まれたような形で、中国人もまた、できていくのであろうか。

ムガル帝国の勢力範囲



グプタ朝の領土



つづいた。グプタ朝のような比較的有力な王朝が出現したこともあるが、地図をみてわかるように、その領域は北インドに限られていた。一五世紀前半のインドには、ゴンドワナ王国など多くの小勢力がたっていたが(32ページの地図参照)、一六世紀はじめに、イスラム系の王朝であるムガル帝国が興り、インド統一にのりだした。

一八世紀はじめのアウラングゼーブ帝の時代に、ムガル帝国はインドの大半を手中におさめるが、そのころすでにヨーロッパ人のインド進出がはじまっていた。ムガル帝国の海軍は弱体で、公海上の戦闘に堪えられなかったため、ヨーロッパの列強があれこれ口実をつくり、軍事的に干渉してきたのである。

インドの言語分布



ヒンズー教徒、イスラム教徒、シーク教徒の三者の対立であるが、そうであってもインド人の間には、インドは一つとする考えが強いのである。

●小勢力分立の時代からインド統一へ

インドの多様性に対応する形で、インドでは古代以来、多くの弱小勢力が分立する形が

れる。

今日のインド世界が、多くの小国に分裂していてもおかしくないが、そこがいったんムガル帝国に統一され、そのあとイギリスがインドをまとめて支配したために、インドの小国分立は避けられ、一つの国家としてまとまっていった。

語族間の対立より深刻なのが、

小勢力モスクワ公国が 大帝国ロシアとなつた経緯とは

●ロシア国内の多彩な民族分布とは

ソビエト連邦崩壊後のロシア共和国で、ロシア・ナショナリズムが高まりはじめたといわれる。ロシア人は長い歴史の中で、自分たちが非ロシア民族を支配するのが当然だとする大ロシア主義をつくり上げてきた。

ロシア人は東スラブ系の白人で、多彩な混血ののちに、青または褐色かつしよくの目と栗色の髪を特徴とする集団をつくり上げた。そして、かれらはロシア帝国についてソビエト連邦でアジアとヨーロッパにまたがる巨大な多民族国家をつくり上げた。36〜37ページの図に示したように、旧ソビエト連邦の領内にはきわめて多様な民族がいる。

そして、ソビエト連邦の解体により、ヨーロッパ系やトルコ系の民族のいくつかが自立した。しかし、現在でもシベリアの多くのトルコ系、アジア系の人々がロシア共和国の支

ムガル帝国侵入前のインド



●イギリス支配とそれから独立

最終的にムガル帝国は、最強の海軍をもつイギリスの保護下に入らざるを得なかった。そして、ムガル帝国の弱腰をみて、地方勢力がつぎつぎに自立した。イギリスのインドに対する経済的支配はしだいに強まり、一八五八年にはムガル皇帝は廃され、インドはイギリスの植民地になった。

第二次世界大戦後、インドの独立が成る。

このとき、ガンジーはインドとパキスタン
の統一言語としてヒンドスタニー語を用いることを主張した。ところが、ヒンディ語使用
者でヒンズー教徒のネールらが実権を握り、ヒンディ語を共通語とした。

これに不満をもつイスラム教徒は、インドから分離独立してパキスタンになった。さら
に、パキスタンは後にムスリム国家を志向するパキスタンとベンガル民族主義を唱えるバ
ングラデシュに分かれた。

国教とした。これ以来、ギリシア正教がロシアの民族宗教になっている。

キエフ公国がガリツィア、ヴォルイニ、ノブゴロド、スーズダイの四公国に分裂して衰退すると、そこにモンゴルの侵入がはじまった。そしてキエフ公国の衰退後の一二七一年に、サイニルという者がモスクワ公国をたて、一四世紀はじめにモスクワ公国はモスクワ大公国となつてめざましく発展した。ノブゴロド公国を併合し、キプチャク・ハン国と幾度も戦い、一五世紀末にはモンゴルの勢力をロシアから追つた。

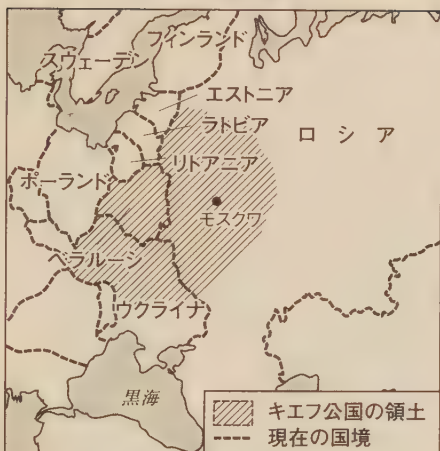
ついで、イヴァン四世が一五四七年に国号をモスクワ帝国と改め、ツァーの称号を用いた。イヴァン四世は「雷帝」^{らいてい}の名でも知られる。かれの時代にシベリア経営もはじまつてゐる。

イヴァン四世は、キプチャク・ハン国分裂後にできたカザン・ハン国とアストラカン・ハン国を併合し、さらにドン・コサツクのエルマークが征服したシベリア・ハン国までも自領に加えている。

●大帝国を築くまでの道すじ

一六世紀末に、イヴァン四世の子孫は断絶した。これによりロシアは帝位争い、農民反

キエフ公国の領土



世紀末に栄えたキエフ公国がある。そのころのキエフ公国の下には、多くの小さな公国があった。キエフ公国の本拠は、今日のウクライナにおかれていた。キエフ公国をロシアとよぶ場合もある。

キエフ公国は、九八〇年にビザンツ帝国（東ローマ帝国）からギリシア正教を受け入れて

配のもとにおかれている。

地図をみると、ロシア人が中央アジア（西トルキスタン）のトルコ系民族の居住地をさけて、比較的暖かいシベリア南端だけに広がったありさまがわかる。カムチャツカ半島南部や樺太、沿海州は、ロシア人からみれば暖かい地域になるであろう。さらに北方領土とされる南千島にも、ロシア人の移住者が多くいる。

●モスクワ帝国はこうして生まれた

ロシア最古の王朝として、九世紀末から一二

旧ソ連の民族



域を拡大し、シベリア経営に力を入れた。かれのときに、ロシアの東方進出は一段落し、ロシアの領域は太平洋沿岸にまでいたった。

ロシアは一七四一年に、ベーリング海峡を渡ってアラスカを得たが、一八六七年にそこをアメリカに売却している。

ロシアの日本接近は、一八世紀末のエカテリーナ十二世のときのことである。それ以前に樺太や千島の人々は、日本ともロシアとも交易をはじめていた。そのため、一七九二年にロシア



乱、ポーランド軍の侵入などの大混乱におちいった。そして、国民義勇軍の働きで混乱がおさまられた後に、全国会議はイヴァン四世の姻戚であるロマノフ家のミハイルを皇帝に選んだ。ロマノフ朝の成立である。

ロマノフ朝のもとで中央集権化が急速にすすんだが、それは大地主である貴族層による農奴支配を強化するものであった。

一七世紀末から一八世紀はじめにかけて活躍したピョートル一世は絶対主義を確立し、トルコ、スウェーデンとの戦争で領

ヨーロッパ文明の基礎をつくった ローマ帝国の大侵攻

●「すべての道はローマに通ず」

ローマ帝国は、ヨーロッパ史上きわめて重要な位置を占めている。ローマは長い年月をかけて大帝国をつくり上げ、それを比較的長期間にわたって維持した。ローマの興りが紀元前六世紀末で、その全盛期が紀元前後から二世紀までの二〇〇年余りである。三九五年にローマ帝国は、東ローマ帝国と西ローマ帝国とに分裂したが、ローマを本拠とした西ローマ帝国の滅亡が五世紀半ばであるから、ローマ帝国は約一〇〇〇年余りにわたって存在したことになる。

ビザンツ（東ローマ）帝国は一五世紀半ばまでつづいたので、東ローマまで入れるとローマは二〇〇〇年近くの繁栄を保ったことになる。そして、古代ローマ帝国は、ローマを中心に道路を整備し、帝国の各地から人間や物資を集めた。

ロシアの領土拡大



の使節ラクスマンが北海道の根室^{ねむろ}に來航し通商を求めた。

このとき、ロシアは日口間の領土の境界も明らかにしようと考えていたとみられるが、日本は鎖国策にもとづき、ラクスマンを受け入れず海防の強化に着手した。

ロシアはこのあと中国の清朝の領域に目をつけ、一八五八年のアイグン条約でアムール川以北を、一八六〇年の北京条約で沿海州を手に入れた、そこに東方支配の拠点ウラジオストクの町を建設した。ロシアの中央アジア進出も、一八八〇年には完成する。

このあと、ロシア帝国は民族差別を強化した。そのため非ロシア人は、ロシア帝国の支配を「民族の牢獄」とよんだという。

第二次ポエニ戦争



かれらは広大な土地を得て、奴隷を使って農場経営をはじめた。そして、そのような有力者がより多くの富と奴隷とを求めて、ローマを征服活動に向かわせることになる。

●アジア・ヨーロッパの地図を塗り替えたローマ帝国

紀元前一世紀に多くの私兵をかかえる有力者が、ローマの国政を握るようになった。そして、紀元前二七年には政争に勝ち、抜いたオクタヴィアヌスがローマ皇帝になる。そして、帝制になったことにより、ローマの対外進出は加速した。そして、二世紀には地中海沿岸全域とフランスやイギリスの大部分がローマ領になっている。この間、エルサレムはローマ人に破壊され、ユダヤ人は離散している。

第一次ポエニ戦争



ポエニ戦争でカルタゴを従えたローマは、地中海沿岸のあちこちのカルタゴ領を得た。これによって、ローマがはじめて海外の属州を支配するようになったことになる。

この海外領の獲得が、ローマの社会を大きく変えた。それまでのローマでは平等を重んじる共和制がとられていたが、ポエニ戦争のあと属州の総督や海外領の徴税請負人をつとめた富豪層があらわれた。

● 大帝国になるきっかけとなったポエニ戦争

ローマは、もとはイタリア半島の小勢力であった。ローマが大帝国になるきっかけは、三度にわたって一〇〇年余りかけて行なわれた、ローマとカルタゴによるポエニ戦争である。

第一次ポエニ戦争が紀元前二六四年にはじまり、第三次ポエニ戦争が紀元前一四六年に終わっている。それまでは、フェニキア系のカルタゴが地中海のあちこちに植民市をつくり、交易によって栄えていた。

世界史上最大の領土を 支配したモンゴル帝国の盛衰

●モンゴル族はどの民族を指すのか

一三世紀後半に、遊牧民族であるモンゴル族が、中国からヨーロッパの一部におよ大帝国をつくった。それは、中国、中央アジア、イラン、ヨーロッパなどの多様な文化圏を含む勢力で、世界史上最大の帝国といってよいものである。

しかし、そのようなめざましい征服活動を行なったモンゴル族の正体は、十分明らかにされていない。広くとれば、モンゴル系譜言語を用いるアジア系の人々がモンゴル族になるが、それならば中央アジア東部の遊牧民族がすべてモンゴル人になってしまう。

現在では、ふつうはモンゴル人民共和国のモンゴル人約一六〇万人と中国の内モンゴル自治区にいる約三四〇万人のモンゴル人とを合わせた、約五〇〇万人がモンゴル族とされている。

ローマ帝国の最大領域



ローマ帝国に滅ぼされた民族は多いが、五世紀にゲルマン人に滅ぼされたのちに、ローマ帝国が復活する場面はなかった。イタリア人は、その後ヨーロッパの小勢力として終わった。

しかし、今日のヨーロッパ文化の基礎がイタリアでつくられたことには注目してよいだろう。

ローマ帝国はアジア、ヨーロッパの広い範囲の文化を吸収し、それを融合させて次の世代に伝えたのだ。

ローマ文化の核にはギリシア文化があるが、それだけでなく多くの文化の複合の上に成り立っていることにより、ローマ文化はヨーロッパ文化の基礎として重んじられたのだ。考えてみれば、ルネッサンスはイタリアから起こったのである。

匈奴の最大領域



チンギス・ハンはウイグルを従え、中国北部を押さえていた金朝に侵入し、中央アジアのホラズム国を滅ぼした。さらに、モンゴル軍の一部はロシアやイランにも侵入した。

英雄チンギス・ハンの死後、チンギス・ハンの子孫が、チンギス・ハンの遺志をついで、モンゴル帝国の拡大につとめた。かれらは、文明のすすんだ中国に目をつけ、一二三四年に金朝を滅ぼした。その後、中国南部の南宋朝と朝鮮半島の高麗に圧力を加えた。

一方、チンギス・ハンの孫のバトウは、一二三六年から一二四二年にかけて大がかりなヨーロッパ遠征を行なった。かれはポーランド、フランス、ハンガリーに侵入し、あちこちで勝利をおさめた。

「モンゴル族」とは、もとはチンギス・ハンの一族を首長とする部族の名前であった。一二世紀のモンゴルの草原には、中央にモンゴル族があり、その東にタタール族、南にオングート族、西にナイマン族とケレイト族、北にメルキト族がいた。

●チンギス・ハンはどのように領土を拡大したのか

テムジン（のちのチンギス・ハン）は、ケレイト族のワン・ハンと提携しつつ、モンゴル草原の諸部族を制圧していった。そして、最後にワン・ハンを破り、ナイマン族やタタール族を討った。これにより、テムジンはモンゴル草原全体の支配者として人々に認められ、チンギス・ハンと名乗るようになった。一二〇六年のことである。このときチンギス・ハンに従った遊牧民の諸部族の総称として「モンゴル」の名前が用いられるようになった。

かれらの居住地に対応する地域が、今日のモンゴル人民共和国と内モンゴル自治区とを合わせた範囲である。つまり、チンギス・ハン以前のモンゴル族の歴史は明らかでないことになる。草原に広大な匈奴きょうとの帝国（左の地図参照）をつくり前漢朝と争った冒頓ぼくと単于たんうが、モンゴル族の先祖にあたるとする説もある。しかし、かれらとモンゴル族とのつながりは明らかでなく、匈奴の一部がヨーロッパに侵入してフン族になったとする意見もある。

力な元朝の軍勢との戦いで勢力を消耗し、そこにつけ込んだチャガタイ・ハン国に併合された。チャガタイ・ハン国はそれから間もなくイスラム化し、一三三〇年に東西に分かれた。西チャガタイ・ハン国は一四世紀末に、チャガタイ・ハン国の旧領の大部分をチムールに奪われ滅んだが、東チャガタイ・ハン国の系譜をひく小勢力は、一七世紀にモンゴル系のジュンガル王国に併合されるまでつづいた。

イル・ハン国は、チムールの勢力が西アジアにまで及んだ一四一一年に滅んだ。キプチャク・ハン国だけは、比較的長く繁栄し、一四八〇年まで生き残った。

チンギス・ハンという名将の指揮のもとでは、優勢な騎馬勢で百戦百勝であったモンゴル族だが、習俗の違う異民族を長期にわたって武力だけでは支配できなかった。

元朝は、一三六八年に中国人の民族運動ともよべき紅巾こうきんの乱で倒された。

明代みんになって、モンゴル族がモンゴル草原に北元をつくったが、北元は一三九一年に滅亡した。そのあとモンゴル族は諸勢力に分裂し、後に清朝の征服を受けた。

二〇世紀になって、外蒙古で独立の機運が高まり、一九二四年にソビエトの支援を受けて社会主義国であるモンゴル人民共和国が成立した。

元朝と四ハン国



チンギス・ハンの別系統の孫であるブラグは、一二五三年から一二五八年に西南アジアへ出兵し、バグダードやダマスクスを得た。

●なぜ大帝国は滅んだか

一三世紀後半に、モンゴル帝国は五つに分裂した(上の地図参照)。チンギス・ハンの嫡系の孫にあたるフビライは、モンゴル草原と金朝の遺領とを合わせて支配し元朝^{げん}を興した。元朝は、一二七六年に南宋朝を滅ぼしている。

そして、チンギス・ハンの主立った子孫四人が元朝から自立し、オゴタイ・ハン国、チャガタイ・ハン国、キプチャク・ハン国、イル・ハン国を形成した。

オゴタイ・ハン国は元朝と対立したため、強

イギリス系アメリカ人の多い州



(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

後「サラダボウル論」が唱えられた。それは、アメリカというサラダボウルの中で、多様な民族がもとの形を保ったまま、アメリカという全体として調和のとれたサラダになることが好ましいとするものだ。

アメリカの東海岸では、イギリス的要素が強く、西海岸は非イギリス的であるが、今日のアメリカのIT産業の中心地シリコンバレーは西海岸にある。

●列強の植民地化を地図で見る

アメリカは、植民地として開発された当初から、多民族国家となる運命をになつていたといえる。50ページに地図で示したが、イギリス、フランス、スペインなどが思い思いに

地図が示す アメリカ合衆国発展のいきさつ

●多民族国家としてのアメリカ

現在、アメリカはGNPが世界一の、もつとも経済的繁栄を誇る国である。そして、アメリカにはイギリス的要素と、まったく新しい多民族国家としての要素とが同居している。アメリカは、イギリスの植民地であつた東部の一三州から発足した。それゆえ、いまでも「WASP（ワスプ）」とよばれるイギリス系の人々をアメリカ人の主流とする考えが強い。アメリカへの後続の移民は、ワスプの生き方を見習ってきたが、近年になってワスプの地位が揺らいでいる。左の図に示したように、イギリス系移民が三〇パーセントを超える州が少なくなっている。近年では、メキシコなどから来たヒスパニック系やアジア系のアメリカ人の増加も目立つ。

アメリカでは平等、公正、機会均等等などが美德とされてきた。そして、第二次世界大戦

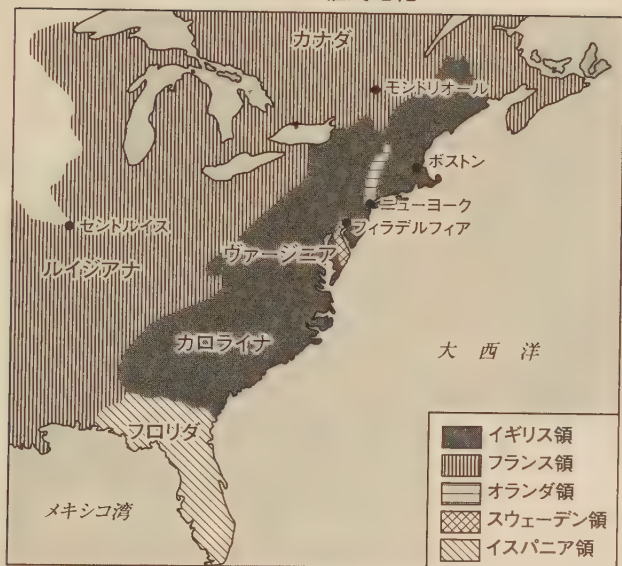
ことにより、イギリス系住民が東海岸の北から南までをほぼ押さえる形がつくられた。しかし、イギリスの重税に反発する一三州が一七七六年に独立宣言を発し、イギリスとの戦争に入ることになる。これはアメリカの勝利に終わり、一七八三年のパリ条約でアメリカは独立を承認されたうえに、カナダ以外の北米のイギリス植民地も得た。

●現在のアメリカの形はいつ整ったのか

アメリカは建国後、フランスの植民地、スペインの植民地を買収して発展していった。そして、一九世紀に西部開拓がさかんになるなかで、アメリカはテキサスを一方的に併合し、一八四六年にはそれに抗議するメキシコを破り、カリフォルニアなどを得た。さらにアメリカは、一八四六年のオレゴン協定でイギリスから太平洋沿岸北部を得た。このあとアラスカの買収と武力によるハワイ王国併合があり、今日のアメリカの形がほぼ整う。

一九世紀から二〇世紀にかけても、西部に多くの未開発の土地をかかえたアメリカに、各地から多くの移住者がやって来た。日本からの移民もいれば、アメリカで経済的に成功したユダヤ人もいた。多民族国家としての今日のアメリカは、きわめて長い時期をかけてつくられたといえる。

アメリカの植民地化

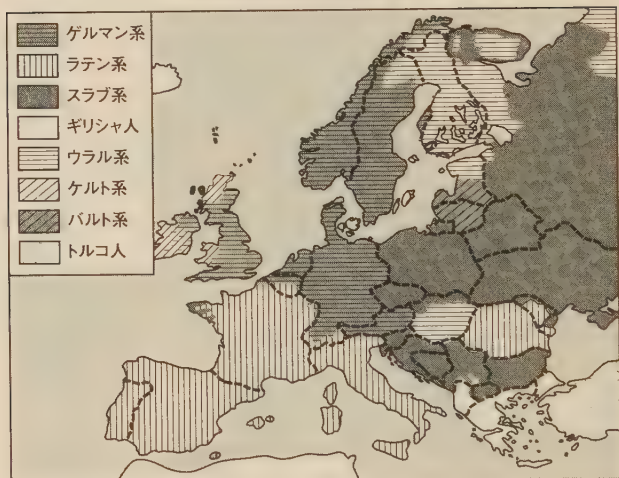


今日のアメリカ合衆国の範囲に植民地を広げていった。

ルイジアナにはフランス人が、ニューヨークやニュージャージーにはオランダ人が、デラウェアにはスウェーデン人が、フロリダにはスペイン人がそれぞれ植民地をつくった。メキシコの領域も北方に広がってきた。

なかでも、一六〇七年にはじまるイギリス植民地の発展はめざましかった。アメリカとの通商にもっとも力を入れたのもイギリスである。そして、オランダやスウェーデンの開拓地がイギリス植民地に吸収された

ヨーロッパの民族の分布



このようなヨーロッパ人は、漢族やインド人のような大きな集団に対応するものといえる。そして、そのヨーロッパ人が、政治的にきわめて多くの民族に分けられていったのである。

フランスは、最初から一つのまとまった国であったのでもなく、単一の文化を共有していたのでもなかった。

フランスは、フランク王国が三つに分かれたときにつくられた西フランク王国が発展した国家である。

このフランスの名称は、フランク族に由来し、フランス王の名称は、一三世紀はじめのカペー朝から用いられるようになったものである。

フランス人の民族意識は 隣国との抗争により高められた

●フランス民族のルーツは何か

一八一九世紀に近代社会を生み出す先駆けの役割を果たしたのが、イギリス、フランス、ドイツのヨーロッパ先進国家である。ところが、イギリス民族、フランス民族、ドイツ民族というものの正体はきわめてわかりにくい。

いまのフランス人が、自分はフランス民族であるという意識を強くもっていることは間違いない。しかし、その考えはイギリス人、ドイツ人などの周辺民族との対抗関係の中で強められていったものであるらしい。

ゲルマン民族という大きなまとまりがあるのは確かで、その集団は体型や文化の基層を共有する。ゲルマン民族とラテン民族、スラブ民族とをひとまとめにして、ヨーロッパのコーカソイド（白人）として扱うこともできる。

フランク王国の分裂



ンスの領域は、いまのフランスからアルザス、プロヴァンス伯領、ロレーヌと他のいくつかの小地域を除く範囲にまで拡大していた。

●戦争が民族意識を高め、国境を確定した

カペー朝のものとフランスで、キリスト教を基礎にゲルマン、ローマ、ケルト的要素を合わせた共通の文化が育っていった。

そして、カペー朝について興ったバロア朝のフランスとイギリスとの間で、一三三九年から一〇〇年余りにわたる百年戦争が繰り広げられた。百年戦争までは、イギリスが今日ではフランス領となっているフランドル地方を領有していた。

この戦いで、フランス人は自分たちと異な

●フランク王国の領土の拡大

ゲルマン民族大移動が四世紀末から五世紀はじめを中心とする時期になされ、ローマ領内にゲルマン系の王国が多くつくられた。その中でもっとも有力であったのが、フランク族のフランク王国である。フランク王家は、いち早くカトリックに改宗し、ローマ教皇の保護者の立場をとって西ローマ皇帝の称号を与えられ、他の王国より優位に立った。

このフランク王家が、八四三年にヴェルダン条約によつて三つに分かれた。それにより、後のドイツにあたる東フランク王国と、イタリアにつながるロタール領と、西フランク王国とがつけられた。

八七〇年にメルセン条約が結ばれ、領地の再分割がなされ、これにより、西フランクはイタリア王国領の一部を得た。しかし、このときの西フランク王国の領域は現在のフランスのその約四分の三程度にすぎなかった。

九八七年に興ったカペー朝のもとで、フランスは西ヨーロッパの強国としての地位をしっかりと確立していった。中世のフランスは、いくつもの貴族の領地に分かれていたが、フランス王家の貴族に対する指導力は、ドイツ（神聖ローマ帝国）のそれよりはるかに強かった。そのため、カペー朝は順調に成長した。そのカペー朝の最盛期である一三世紀のフラ

ハプスブルク家が手に入れた 神聖ローマ帝国の領土

●神聖ローマ皇帝が支配した領域は？

ドイツは近代にいたるまで、多くの王国や貴族領に分かれていた。ドイツ統一が成るのは、明治維新より新しい一八七一年である。イタリアの統一も、その少し前によく成し遂げられていた。

先発の近代国家、イギリス、フランス、アメリカ、ロシアのあとをドイツ、日本、イタリアが追う形がつけられたのである。この図式が、見方によっては第二次世界大戦の連合国側と枢軸国側との対立につながるといえる。

ドイツは、前にあげた八世紀の東フランク王国の系譜をひくが、東フランクの領域は西フランクより広がった。この東フランク王国は九世紀はじめに倒れ、ドイツでは多くの貴族が自立して競い合う形がつけられた。

る習俗をもつイギリス軍の幾度にもわたる侵入を受けた。そのためフランスの民族意識が急速に高まっていった。さらに、長期にわたる戦いが、貴族層の没落をもたらした。

百年戦争は、神のお告げを受けた少女ジャンヌ・ダルクがフランス王シャルル七世を助けるという劇的場面をへて、フランスの勝利に終わった。

そして、このとき羊毛工業地帯であるフランドル地方が、フランスに属することになったため、イギリス世界と大陸とが、切り離されることになった。これによって、フランスの民族的団結と国王の専制への道が開かれたのである。

ついで百年戦争の後にあたる一四八一年に、プロヴァンス伯領がフランスに併合された。これにより、今日にいたるフランスとイタリアの境界がほぼ固まったのである。

バロア朝の断絶により、一五八九年にブルボン朝がたち、そのもとで絶対王制が形づくられた。そして、ブルボン家のルイ十三世、ルイ十四世の時代に、フランスは三十年戦争に加わり、ドイツ出兵によってアルザスなどを得た。これにより、今日のフランスの東方の国境がほぼ定まる。

アルザス、ロレーヌは一八世紀末の普仏戦争ふつにより、いったんドイツ領となるが、第一次大戦後にフランスに返された。

一二七三年にハプスブルク家のルドルフ一世が、貴族らの手で神聖ローマ皇帝に選ばれた。しかし、ローマ教皇がそのことを認めなかったため、ルドルフ一世はドイツ王とよばれた。

ルドルフ一世から数えて五代目の子孫にあたるフリードリヒ三世が、一四五二年になってようやく神聖ローマ皇帝とされ、これ以後、ハプスブルク家は代々神聖ローマ皇帝の地位を受け継ぐことになる。そのころのハプスブルク家は、次のページの地図で示したように、ウィーン周辺とドイツ国内の飛び地をいくつか支配していた。そして、その中には、フランスに接する現在のオランダに相当するあたりも含まれていた。

●スペインまで併せた大帝国の出現

一六世紀の絶対王制期におけるハプスブルク家の成長はめざましかった。この時期に、かれらはヨーロッパの有力な王家や貴族との婚姻を繰り返した。

そして、よその王家が断絶した機会をとらえて、姻戚関係を根拠にブルグンド、ネーデルランドといった他の国の君主の地位をつぎつぎにわがものにしていった。とくに、オーストリアのマクシミリアン一世の孫のカール五世が、一五一六年にスペイン王位を継承し

11世紀末のヨーロッパ



九六二年にオットー一世が、東フランクの旧領とイタリアの一部を統一し、ローマ教皇からフランク王国の正統の後継者であることをしめす西ローマ皇帝の称号をもらった。これ以後、ドイツの支配者は神聖ローマ皇帝とよばれることになる。上の図を見てもわかるように、神聖ローマ帝国の領域はフランスよりはるかに広い。

●オーストリアを本拠にするハプスブルク家の成長
オットー一世の家は早く衰退し、ドイツでは小王国や貴族領の成長が目立った。その中でも、貴族の一つハプスブルク家の成長はめざましかった。かれらは、いまのオーストリアを本拠にしていた。

ローマ帝国を滅亡させた オスマントルコの広域支配

●世界に広がるトルコ族の発祥

ヨーロッパ世界と中国を中心とした東アジア世界との間に、広大な乾燥地帯がある。そこは、ふつうは中央アジア（トルキスタン）と西アジアとに分けられている。両者を合わせて「シルクロード地帯」などといわれる場合もあるが、そこは古代以来、東洋と西洋の文化の交流に大きな役割を果たしてきた。

もとは中央アジアの中国に近い部分（東トルキスタン）に、アジア系の人々（モンゴロイド）で、のちのモンゴル族につらなる人々がいた。そして、その西方（西トルキスタン）でトルコ族が活躍していた。さらに西方のイラン高原を中心とする西アジアが、イラン文化の世界になる。そのイラン人はコーカソイド（白人）である。

今日、トルコ族は、中央アジア、シベリア、西アジアから北アフリカ、インド北部、東

ハプスブルク家の領土



たことの意義は大きい。かれの母のファナがスペイン王女だったからである。

マクシミリアン一世が亡くなった一五一九年に、カール五世は神聖ローマ皇帝を兼ねた。これにより図に示した、スペイン（ポルトガルを含む）、オーストリア、ナポリ、シチリア、オランダなどを合わせた大帝国が出現した。さらに、ハプスブルク家は一五二六年にボヘミア、ハンガリー王も兼ねた。しかし、ハプスブルク家の全盛期は短かった。その後、ハプスブルク家はオーストリア系ハプスブルク家と、スペイン系ハプスブルク家とに分かれ、スペイン系は一七世紀末に断絶した。オーストリアも、そのころからフランスやプロシアに押されてしだいに後退していった。

突厥とセルジュクトルコの領域



八世紀半ばには、トルコ族の一部族が興した回紇（ウイグル）がたち、突厥を併合し、唐朝と戦った。

そして回紇が九世紀半ばに滅びると、ウイグルの人々は南や西に移住した。

かれらは、中央アジアでアリア人と混血し、イスラム教を受け入れ、西方のイスラム諸王朝と交流をもった。このトルコ族の一部は、傭兵（ようへい）などとしてイスラム世界に入り込んでいった。

一一世紀に、トルコの一部族が中央アジアからイランに侵入し、ホラサーン（イラン北部）でセルジュクトルコをたてた。セルジューク朝は、そのあとバグダッドを征服し、小アジアまで領域を広げた。

南アジア、ヨーロッパの一部という広大な範囲に広まっている。現在のトルコ族は、アルタイ語系のテュルク語を使い、イスラム教を信仰している。

トルコ人の国として小アジアのトルコ共和国が知られるが、そのトルコ語はテュルク語の一種である。このほかに、かつてトルキスタンとよばれた地域にトルコ族の大きな集団が居住する。そこはいまは、中国の新疆ウイグル自治区と旧ソビエト連邦の一員であったカザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャンといった国々になっている。

●中国からイスラムまで領有したトルコ族の発展

現在では、トルコ共和国の住民とトルキスタンの住民とでは、同じトルコ族でもほとんど異民族のようになっていいる。

トルコ族の先祖にあたる人々は、もとはバイカル湖のあたりにいたアジア系の集団であったらしい。六世紀半ばに、中央アジアでトルコ族がはじめて突厥トウケツ（テュルク）という国家をつくった。突厥は、しばしば中国に侵入し、独自の突厥文字をつくった。この突厥は、五八三年に東突厥と西突厥とに分裂し、その後衰退した。

オスマントルコは、一四世紀から一五世紀前半にかけてしきりに領土拡大につとめた。そして一四五三年にはビザンツ帝国（東ローマ帝国）の首都コンスタンチノープルを攻略した。これによってローマ帝国の系譜をひく勢力は完全に姿を消したのだった。

これ以前に、オスマントルコはバルカン半島へも進出していた。さらに一六世紀はじめには、エジプトの 맘ルーク朝がオスマントルコに従った。

これによってオスマン帝国の支配者スルタンはイスラム世界の長としてのカリフの称号も名乗るようになった。アッバース朝がモンゴル族のフラグに滅ぼされていたため、オスマン帝国はマホメットの流れをくむ者を上に立てることができず、自らカリフと称さなければならなかった。

全盛期のオスマン帝国の領域は、東ヨーロッパ、小アジア、メソポタミア、エジプトなどを含む広大なものであり、その都はかつてビザンチン文化が栄えたコンスタンチノープルにおかれた。

このようなトルコ族の広域支配は、第一次世界大戦までつづいた。しかし、オスマン朝の支配によりもたらされたバルカン半島の混乱は、現在までもちこされている。

オスマントルコの最大領土(1683年)



●ローマ帝国を滅ぼしたオスマントルコ

セルジユクトルコは東方では、北インド、アフガニスタンのイスラム系の王朝であるガズニ朝と争い、西方では中カリフ国とよばれたエジプトのイスラム勢力ファティマ朝と戦った。

しかし、かれらは形式上はアッバース朝を存続させ、アッバース朝のカリフを宗教的指導者と仰いだ。キリスト教国であるアルメニアだけは、セルジユク朝に対抗して独立を保ちつづけていた。

セルジユク朝は、一二世紀半ばに滅びたが、セルジユク朝の征服活動によって、小アジアに多くのトルコ族が居住することになった。

そして、一二九九年に小アジアのトルコ族のオスマンがオスマントルコ帝国をたてた。

イランの民族分布 (参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)



ここに多様な民族が入り込んできたのである。ところで、アーリア系のコーカソイド(白人)でイラン語を話す人々が、イラン人だとする定義に従えば、イラン人はイランの国外にも多くいることになる。アフガニスタンから中央アジアのタジキスタンもイラン圏になるのだ。

●アケメネス朝ペルシアの後裔・イラン人

「ペルシア」の語は、古代のアケメネス朝が興ったイラン南西部のファールス地方にちなむものである。このファールスで紀元前七〇〇年ごろペルシア人の王朝が興った。これがアケメネス朝である。しかし、そのころのペルシア人は、アーリア系の一部族にすぎなかった。

ペルシア人の王朝はしだいに成長し、紀元前

イスラム勢力に侵略されながら 独自の伝統を守ったイラン人

●イランが多民族国家になったわけ

イスラム教は、正統派とされるスンニー派とそれと対立するシーア派とに分かれる。現在、アラブ系諸国の多くがスンニー派である中であつて、イランはシーア派の唯一の有力勢力としてつづいてゐる。イランは、アラブ世界の中で孤立した存在であるといえる。

しかも、イランは多民族国家であるが、イランの支配層であるペルシア人（イラン人）は独自の文化にきわめて高い誇りをもっている。そのため、イランではイラン人と少数民族との紛争が絶えない。

イラン人はイラン国民の約五一パーセントにすぎず、イランの人口の約二四パーセントをアゼリー人、ギラキ人、マザンダラー人、クルド人がそれぞれ七〇八パーセントを占めてゐる。イラン高原を中心とする西アジアが、古くから東西の交通路上にあつたために、そ

針がとられたのである。

アケメネス朝支配下の人々がすべてイラン人になったわけではないが、西アジアのアリア系の部族ですすんでペルシア語を受け入れ、支配層と同化した者も多い。このようにしてつくられたイラン人は、自分たちはアケメネス朝の後裔こうえいという強い誇りを共有して団結することになった。

全盛期のアケメネス朝の領域は、西アジア、メソポタミア、エジプト、小アジアと、ヨーロッパの一部にあたるトラキア、マケドニアにまで及んでいた。しかし、バビロニア、エジプトなどの、かつて独自の文化が栄えた範囲では、アケメネス朝滅亡後はペルシアの影響がほとんどみられなくなってしまった。

●ササン朝以後のペルシア

アケメネス朝は、紀元前三三〇年にアレクサンダー大王に滅ぼされ、アレクサンダーの没後にはギリシア系のセレウコス朝シリアの支配下に入った。

紀元前三世紀半ばに北部イランにイラン系のパルティアが興ったが、パルティアにはギリシア系の文化が受け継がれた。ついで三世紀はじめには、ササン朝ペルシアがパルティ

アケメネス朝ペルシア(前500年頃)



五五〇年にメディア王国を倒し、イラン高原の主要部を得た。そのあとアケメネス朝は、メソポタミアの新バビロニアを滅ぼし、中央アジアにも出兵し、紀元前五二五年にはエジプトを占領して古代オリエント世界を統一した。

東はインドとの境界から、西は小アジア、エジプトにいたる大帝國が出現したわけであるが、この領域はヨーロッパ全体をはるかに上回る広さであった。当然、そこには言語、宗教、習俗を異にする多くの民族が含まれていた。

ペルシアは、広大な領域に安定をもたらすために各地域の既存の体制を温存しつつ、新しい秩序の創出につとめたため、異民族にきわめて寛容に接した。原則として軍役と貢納義務を守れば、必要以上に諸豪族の内政に干渉しない方

2
章

強国の脅威から文化と誇りを
死守した小国の苦闘

ササン朝ペルシアとその周辺



アを倒して、西アジアを統一している。ササン朝が四〇〇年余りにわたってゾロアスター教を国教とする神政政治を行なったことにより、イラン人の民族意識はより強まった。

ササン朝とローマ帝国などの他民族との勢力争いはあったが、ササン朝はイラン人の居住地の外まで支配圏を広げようとしなかった。ササン朝がイスラム帝国に征服されたことによって、イランはイスラム化するが、ササン朝のもとで育ったイランの民族意識は強く、これ以後イラン高原でペルシア風イスラム文化とよぶべきものが栄え、その独自の伝統は長く受け継がれた。イランでは現在でも、ササン朝以来のペルシア文化が栄え、そこはアラブの他の国々と一線を画した生きかたをしている。

ヨーロッパの小国

| 国名 | 面積 | 人口 |
|-------------|---------------------|----------|
| アンドラ公国 | 450km ² | 6万8000人 |
| サンマリノ | 60km ² | 2万5000人 |
| マルタ共和国 | 320km ² | 37万1000人 |
| モナコ共和国 | 1.5km ² | 3万2000人 |
| リヒテンシュタイン侯国 | 160km ² | 3万1000人 |
| ルクセンブルク大公国 | 3000km ² | 40万6000人 |
| バチカン市国 | 0.4km ² | 1000人 |

を認められているが、現在フランス政府とスペインのウルヘム司教との共同統治のもとにある。そして、公国は両者に一定の租税を納めている。

●ルクセンブルクとモナコの成り立ち

現在のルクセンブルク市に城がおかれ、その周辺がルクセンブルク伯領になったのが一〇世紀末である。これが今日のルクセンブルクの前身であるが、そこは一五世紀はじめにいったんネーデルランド(後のオランダ)の一部とされた。ルクセンブルクは一六八四年にルイ十四世に征服され、まもなくフランス領になった。そして、ナポレオン戦争後にあたる一八一五年のウィーン条約で、ルクセンブルクは自立を認められたが、その君主がオランダ王の下の大公と

ヨーロッパには、なぜ いくつもの小国があるのか

●ヨーロッパに小国が存続するわけは？

ヨーロッパには、左の表に示したようないくつかの小国がある。バチカン市国については別に述べるが、このような小国がつづいた背景には、ヨーロッパ社会の複雑さがある。

小貴族の領地や自由都市が、民族国家に組み入れられなかった場合もある。また、二大勢力の間にあっていずれにも属さぬまま、現在まで独立を保った例もある。

リヒテンシュタインは、一七一九年に成立した国家で、現在そこは国防をスイスに代行してもらっている。その地は、もとは神聖ローマ帝国に属していたが、スイスとオーストリアに囲まれた位置にあったため、一九世紀のドイツ統一にあたってドイツへの併合を免れたのである。

アンドラ公国は、フランスとスペインとの間のピレネー山脈の奥地にあったため、自立

フランスに囲まれた小国モナコは古くからの貿易港で、ジェノバ市、スペイン、サルジニアなどの支配を受けたのちに、一八六一年からフランス保護下の公国となっている。

●サンマリノとマルタが独立できた理由

イタリア半島中部にあるサンマリノは、一二六三年に独自の憲章を定めた、世界最古の共和国である。石灰岩質のカルペーニョ山の北東部にその国はある。

石工いぐの集団がそこに住み着き、共同体をつくったのがサンマリノの興りだといわれる。かれらは一世紀に地勢を生かして、そこに堅固な城を築いて団結した。

それは、イスラム教徒やノルマン人の侵入に備えるものであった。そして、侵略者と戦うなかでサンマリノの人々の独立志向が高まった。かれらは貴族支配に抵抗し、ローマ教皇の保護の下で自立した。拡大政策をとる有力貴族の領地ではなく、教皇領の中にあつたことがサンマリノの独立をもたらしただといえる。

そして、一五世紀半ばに六〇人から成る大評議会がおかれ、それを中心に政治組織が整えられた。以来、サンマリノは独立を保ちつづけているが、その経済はイタリアに依存しなければ成り立たない。現在、サンマリノは、国境における出入国管理を行なっておら

ウィーン会議後のヨーロッパ



なり、オランダの間接支配を受けることになった。同時に、ドイツ連邦の一員となるというややこしい立場にもおかれた。

一九世紀はじめにベルギーがオランダから独立したが、それに前後して、ルクセンブルクも実質的に独立を勝ち取り、一八六七年に永世中立国となり、ドイツの統一に加わらないことを正式に認められた。その人々の独立の願いが強く、何度も強国の支配を退けてきたありさまがわかる。一九世紀末からルクセンブルクは鉄鋼業などの工業化をすすめ、いまでもEUの中にあつて、きわめて豊かな国になっている。

三邦から発展したスイスが 永世中立国として一國を成した理由とは

●原初三邦によるスイスの誕生

山と湖の国として知られるスイスは、永世中立國を宣言した、世界でもっとも平和で安定した國である。

歴史的にみればスイスはドイツになるはずであるが、現在のスイスはドイツ語が用いられる地域、フランス語の地域、イタリア語の地域に分かれる。このことから、ドイツ人、フランス人、イタリア人から成る多民族國家がスイスであるともいえる。

スイス独立は、一二九一年八月一日であった。この日に、中央スイスのウリ、シュウイーツ、ニートワルデン（のちウンテルワルデンとなる）の三地域が永久同盟を結び、互いに力を合わせて自由と自治を守ることを誓い合った。これがスイスの興りである。その三地域は「原初三邦」とよばれている。

ヨーロッパの小国



ず、通貨発行権と関税権をイタリアに委ねている。

住民の強い意志で独立を保った国といえるが、日本人の感覚でいえば、そこはイタリアの属国のようにもみえる。

マルタはシチリア島の南に位置する地中海中部の島で、イタリアのナポリ王国の支配を受けたのち、一六世紀はじめにヨハネ騎士団に与えられた。この島はナポレオンの占領の後、一八〇〇年からイギリス領となり、一九六四年に独立した。イタリアのシチリアにも北アフリカにも属しづらい海の中に位置する島であるから、それが妥当な選択だったろう。

このような例をあげていくと、世界に多様な国があるありさまがわかる。

立した。このほかに、十三邦同盟の保護国や、オーストリアやイタリア語圏から獲得した共同支配地もあった。

つまり、一六世紀はじめには、ほぼ今日のスイスの領域が定まっていたことになる。

●宗教戦争から武装中立の宣言へ

そのころのヨーロッパでは、宗教改革にはじまる旧教（カトリック）と新教（プロテスタント）との対立の嵐が吹き荒れていた。後で述べるように、ドイツの新旧両派の貴族の抗争がとくに激しかった。

一六世紀はじめにスイスのチューリヒ、ベルン、バーゼルなどの小領主が新教を受け入れたが、原初三邦は旧教の側に立った。

そのため、一五二九年と一五三一年にスイス国内でカッペル戦争という宗教戦争が起きた。スイス分裂の危機といえた。

しかし、両派の和約が成り、宗教をめぐる紛争はそれ以上深刻化しなかった。さらに、スイスは国外の宗教戦争に不介入の方針をとった。そして、度重なる出兵要請を断るなかで、スイスの諸領主の間で永世中立に近い発想がつくられていった。

スイスの発展



●現在のスイス領はいつ定まったか

ローマ時代のスイスは、ローマ帝国のゲルマン人に対する防衛の拠点をつとめていた。民族大移動により、ゲルマン人がスイスを制圧し、その地域はフランク王国、ついで神聖ローマ帝国の領域に組み入れられた。

スイスはドイツとイタリアとを結ぶ交通の要衝として重んじられ、神聖ローマ皇帝から帝国直属の地とされた。これにより、そこで多くの小領主が自立することになった。

ハプスブルク家（オーストリア）は自領の隣の要地スイスを力づくで得ようとしたが、原初三邦の同盟軍に敗れた。

これ以後、スイス国内の小領主がつぎつぎに同盟に加わり、一五一三年には十三邦同盟が成

バチカン市国が世界最小の 国として残された理由

●世界最小の国・バチカン市国とは

現在、世界最小の国はローマ市街の中にあるバチカン市国である。その広さは約〇・四平方キロメートルで、住民の数は一〇〇〇人程度である。その程度の広さの土地で、自給自足ができるわけがない。しかし、カトリックであるイタリアが教皇庁の權威を認めているため、バチカン市国の主權が認められているのである。

たとえば、国際法のうえでは、未知の無人島を発見するか、公海を埋め立てれば独立国をつくることはできる。しかし、一般人が大金を投じて埋立地をつくっても、そこはすぐ誰かの侵略を受けて、独立国づくりの夢は挫折^{ざせつ}するだろう。私たちは、日本という国に属し、税金を納めることによって日本の保護を受けて安全を守られているのである。

同様に、イタリアをはじめとするカトリックの勢力の後押しがあるから、反キリスト教

神聖ローマ帝国とスイス



最大の宗教戦争といわれるドイツの三十年戦争の終わりに近い一六四七年に、スイス諸邦間でスイスの武装中立を定めた「防衛軍事協定」がつくられた。これは、その時点ではスイス内部での申し合わせにすぎなかった。

そして、三十年戦争の終結条約であるウエストファリア条約で、スイスの独立が国際的に認められた。これにより、神聖ローマ帝国の境界は、スイスの東方に移された。

スイスは、一六七四年にヨーロッパの国々に対して武装中立を公式に宣言した。この方針は現在まで受け継がれている。

り多少の変化はあるが、原則として選挙によって行なわれた。世襲制でなく選挙制がとられたことが、ローマ教皇が今日までつづいた理由の一つとみられる。

七五四年に、フランク王国の小ピピン王が教皇に教皇領を寄進した。その後、教皇領は新たな寄進によって拡大したり、サラセン帝国の侵入によって縮小したりした。

イタリアでは、長期にわたって多くの小勢力がならび立つ形がつづいた。一一世紀のノルマン人の征服活動を受けて、地中海航路の要地である南イタリアとシチリア島とを合わせた範囲に、一一三〇年にノルマン系のシチリア王国がつけられた。その後一二八二年に、ナポリ王国とシチリア王国とに分裂した。

そして、中世の領域の広さだけでいえば、教皇領、ナポリ王国、シチリア王国とサルジニア島のサルジニア王国とが、イタリアの四大勢力であったといつてよい。一九世紀はじめにナポリ王国とシチリア王国とは合わさって、両シチリア王国となっている。

●なぜ教皇領はこんなに小さくなったのか

形のうえでは、一七世紀はじめから半ばにかけて活躍したウルバン八世のときに、教皇領は最大になっている(82ページの地図参照)。しかし、その時期にすでに宗教改革がはじま

教皇領の領土



の立場をとるカルト教団であつてもバチカンに手出しはできない。バチカンより小さい国は、この先もできないであろう。

●ローマ教皇領の成立

ローマ・カトリック教会の首長であるローマ教皇は、イエスの一番弟子であるペテロの正統の後継者であるとされる。そしてローマ教皇は、自分はイエスの代理として人々を導く資格をもつと唱えている。

ペテロは、イエスの没後にローマに布教を行ない、ローマ教会を設立した。それは、当初は非合法の組織としてローマ帝国から弾圧された。しかし、ローマ帝国がキリスト教を国教とした後に、ローマ教会の長であるペテロの後継者は、皇帝の保護のもとに全教会の支配者となった。

ローマ帝国が東西に分裂し、ローマに本拠をおく西ローマ帝国が五世紀に滅亡したあと、ローマ教会はキリスト教徒の支えによってつづいた。教皇の指名の方法は、時代によ

小国デンマークをめぐって 繰り広げられた北欧三国の抗争

●デンマークによる北欧一帯の支配

北欧のデンマークは、現在では社会福祉のすすんだ平和な小国として知られる。しかし、かつてデンマーク王国は、北欧諸国の抗争の中心として大きな役割を果たしてきた国家であつた。

文献に登場する最初のデンマーク王は、八世紀前半のオンゲンドウスである。かれはバイキングの首長であつたとみられる。その後、デンマーク王家はしだいに成長し、一〇世紀末のハラルド王のころにはデンマークとスウェーデン南部をほぼ統一した。

一〇世紀末からデンマークはイングランドに進出した。そのときの指導者はカヌートである。かれはデンマーク王の弟で、一〇一三年と一〇一五年にイングランドに侵入し、一〇一六年には、ついにイングランド王になった。そして、兄の死によりデンマーク王を継

っており、カトリック勢力は後退しつつあった。そして一八世紀以降、教皇の世俗権は急速に衰微している。これは近代科学が広まり、カトリックが重んじたアリストテレスの科学が否定されたことから来るものである。中世にはカトリック教会が学問、教育を独占したが、近代的な大学では信仰と研究とが厳密に分離されるようになった。

イタリア統一は、一九世紀にサルジニアの手でなされた。このとき、一九世紀半ばにイタリア統一を望む民衆の声が高まるなかで、ローマ教皇ピウス九世の指導のもとに、諸邦君主が協力する体制が生まれそうになったこともあった。

しかし、一八四八年にかけての対オーストリア戦争で教皇が脱落したため、軍事力にすぐれたサルジニアが人々の支持を受けることになった。

サルジニア王（後のイタリア皇帝）は教皇領はイタリアの一部だと唱えた。そして、一八六一年のイタリア帝国成立後、一八七〇年にピエモンツ軍のローマ占領がなされた。これにより、教皇領はイタリアに奪われた。

そして、一九二九年のラテラノ条約により、教皇庁が統治権、主権、中立権をもつバチカン市国が承認された。これによりローマ教皇はバチカン市国の元首として、超国家的立場から、国際問題や道徳、思想問題の指導にあたることになった。

それに対し、北欧では古来のゲルマン（ノルマン）的伝統が強かった。「ノルマン人」とは、民族大移動に加わらず北方に住んでいたゲルマン人をさす当時の言葉で、古代のゲルマン文化はかれらの間により強く受け継がれていた。

一一世紀半ば以降、デンマークとイギリスやドイツ、フランスとの交流は後退し、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー間の交流がさかんになっている。一二〜一三世紀のデンマークの政局には混乱が多かったが、一四世紀に王の支配は安定した。そして、デンマークの王家は、一三八〇年にノルウェー王を兼任することになった。

このデンマーク・ノルウェー連合王国は四〇〇年余りにわたってつづいた。

●プロシアとの戦いでもたらされたものとは

一四世紀末からデンマーク王家は、スウェーデン支配にも野心をもち、デンマーク王家の息のかかった者をスウェーデン王家の養子に送り込んだりした。このようないきさつで、北欧三国はきわめて緊密な関係をもつようになっていった。

一六世紀はじめに、スウェーデンに反デンマークの立場をとる王家が成立し、一七世紀末に、デンマークはスカンジナビア半島南端の領土をスウェーデンに奪われた。

アイルランドが独立国となるまでの 苦難の道のり

●五つの地域から成る「イギリス世界」

厳密に言えば、イギリス世界は五つの地域に分かれる。ここではグレートブリテン島とその西方のアイルランド島とをイギリス世界とする。グレートブリテン島は、イングランド、スコットランド、ウェールズの三地域から成り、アイルランドはアイルランド共和国と北アイルランドとに分割されている。

現在のイギリスの正式名称は、「グレートブリテンおよび北アイルランド共和国」であり、それとアイルランド共和国とを合わせた範囲がイギリス世界である。「イギリス」という言葉には、グレートブリテンおよび北アイルランドという国名をさす広義のものと、グレートブリテン島をさす用例と、イングランドをあらわすもつとも狭義の用法とがある。

このような「イギリス」の語のあいまいさは、イングランド王国がつつぎに他の地域

ホルスタインとシュレスヴィヒ



デンマークの後退がはじまったのである。このあと、デンマークはヨーロッパ諸国間の戦争に局外中立をとりつづける政策をとった。ただし、七年戦争やアメリカ独立戦争のときに、デンマークは交戦国との貿易で大きな利益を上げている。

デンマークは、ナポレオン戦争で中立を維持できず、フランス側について敗れた。このことにより、一八一四年にノルウェーを失った。さらに一八六四年に、デンマーク領が神聖ローマ帝国の旧領に食い込んでいることを口実に、プロシア・オーストリア連合に戦争をしかけられ、南方のホルシュタインとシュレスヴィヒを失った。これにより今日のデンマークの領域が確立した。

その後、デンマークは工業化につとめ小国として繁栄する道をとった。

ケルト四王国とケルト人の侵攻



ズにも侵攻した。ついで、四世紀末にはじまるゲルマン民族大移動のなかで、アングロ族とサクソン族とがイングランドに七王国をたてた。その後、ノルマン人がイングランドを征服したことにより、アングロサクソン族とノルマン人との同化がはじまった。

ノルマン朝は一一七一年にアイルランドを、一二八二年にウェールズを征服した。それでもアイルランドとウェールズにはケルト系の文化が根強く残った。ケルト人はもとはドリッド教を信仰していたが、五世紀ごろ、カトリックに改宗している。

そして、イギリス王家が一五三四年にカトリックからプロテスタントの英国国教会に改宗したことにより、アイルランドとイギリスとの紛争が生じるようになった。

●スコットランド併合と北アイルランド紛争

スコットランドの統一は、アイルランドからの移住民の系譜をひくケルト人によって九世紀

イギリスの五つの地域



●ケルト人とゲルマン民族によるイギリス世界の成立

イギリス世界は、ケルト人とゲルマン民族（ゲルマン人のアングロサクソンとノルマン人）との混血によってつくられた。ケルト人は、紀元前五世紀ごろ大陸から、ブリタニアとよばれていたイギリス世界に移住してきたとされる。

かれらはアイルランドでは、ケルト四王国を築いて繁栄し、スコットランドとウェール

を併合してイギリス世界を統一したことから来るものである。私たちが近代市民社会成立以前のイギリス人としてとらえるものは、正式にはイングランドン人である。

スペイン無敵艦隊を破って海外発展の基礎を固め、絶対王制を築いたエリザベス一世は、イギリス世界全体の王でなく、ウェールズとアイルランド島とを支配下におさめた時期のイングランドの王であった。

つまり、アイルランド人からみれば、アイルランドは間違いなく独立国であつたのだが、イギリス人（イングランド人）からみれば、アイルランドはイギリスの一部であるという奇妙なことになったのである。

そして一六四九年、イギリスのクロムウェルによるアイルランド遠征がなされたことにより、アイルランドは武力によってイギリスの植民地とされてしまうことになる。クロムウェルは、清教徒革命によってスチュアート朝の王制を倒したことで歴史に名を残した、あの人物である。

そして、一六六〇年の王制復古によってスチュアート朝が再興したのちも、イギリスによるアイルランド支配は受け継がれていった。

一九世紀末にアイルランドで反英感情が高まり、アイルランドの主要部は一九二二年にアイルランド自由国として実質上の独立を勝ち取った。そして、一九四九年に完全独立が成り、アイルランド共和国が生まれた。

これに対し、北アイルランドでは、イギリス領のままではよいとするユニオニストと独立を求めるナショナルリストとの対立がつづいている。後者は少数派であるが、その一部はIRA（アイルランド共和軍）の組織をつくりテロ活動を繰り返した。

になされた。そのため、スコットランドでは英語ではなくゲール語が用いられつづけた。中世に、スコットランドはしだいにイングランド化し、王家とイギリス王との姻戚関係も深まった。

一六〇三年にスコットランド王ジェームズ六世が、エリザベス一世の没後に、イギリス王ジェームズ一世として迎えられた。このことをきっかけに、スコットランドはイギリスと同君連合をとるようになり、両国は一八世紀はじめに正式に合併した。

このジェームズ一世の治下に、アイルランド北部のアルスター地方にプロテスタントの農民を大量に移住させる政策がなされた。これにより、カトリックのままのアイルランド島の主要部分と、プロテスタントの多い北アイルランドとの対立が生じた。

一方、合併後のスコットランドでは、スコットランドの伝統を重んじる声が高かった。そのため、イングランドのものと異なるスコットランド教会制度、スコットランド法、独自の銀行制度や教育制度がつくられ長く受け継がれた。

イギリスのアイルランド進出は、きわめてあいまいな形でなされた。一六世紀半ばにイギリスのヘンリー八世が一方的にアイルランド王を自称したが、アイルランドの貴族たちはそれを認めなかった。

カンボジアの変遷



ことからつくられたものとみられる。クメール文化は、インド文化の枠組みを借用してできたものである。

●カンボジアの起源・クメール朝の成立

クメール人は、もともからいたアジア系の住民と先進文化をもつインド系の移住民とが混血してできたとされる。かれらは、一世紀に扶南^{なん}国をつくり、中国やインドのクシャナ朝と交流をもった。

ついで七世紀に、扶南国に代わって真臘^{しんろう}国がつくられたが、真臘国は八世紀に分裂して衰退した。このあとジャヤベルマン二世が八〇二年にクメール朝をたてた。

クメール朝が「真臘」とよばれることもあるが、かれらと真臘国との系譜的關係は明らかでない。

東南アジアの小勢力カンボジアが 独自の文化を守れたわけ

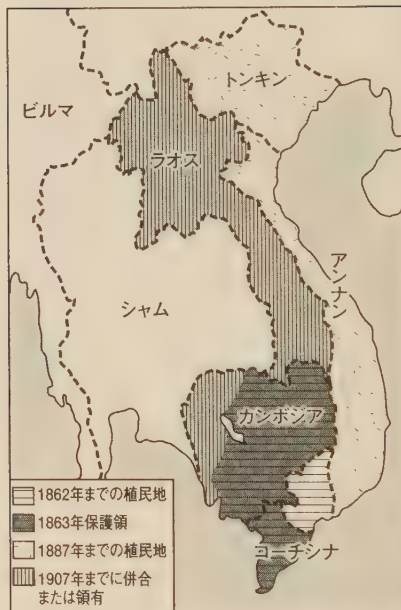
●カンボジアが民族国家として団結できたわけ

現在、東南アジアの中枢部にはベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーなどの国々がある。しかし、民族的にみていまの状況が安定した形であるわけではない。その地域にいる多くの少数民族の意向を無視して、たまたまいくつかの有力な民族の居住地を中心に国境の線引きがなされたからである。

こういった国々の中で、カンボジアだけが比較的民族国家に近い形をとる。その住民の約九〇パーセントをカンボジア人が占めているからだ。カンボジア人について、華僑（かきよう）（中国系）、ベトナム系の人々が多く、少数民族の人は二、三パーセントにすぎない。その中で比較的多いのがチャム族であるが、かれらの数は全人口の一・五パーセント程度である。

このような形は、カンボジアがクメール文化という独自の文化をもって団結しつづけた

フランスのインドシナ支配



れられた。

しかし、カンボジア王家はフランス支配下でもつづき、一九五四年にシアヌーク王の努力により、カンボジアの他の地域から分離した形での独立が成った。

このような形でのカンボジアの自立がなされた背景に、カンボジア人が強い民族意識をもっていることがあげられる。かれらは、日本に邪馬台国ができる三世紀より二〇〇年も

早く独自の文化をもつ扶南国をつくり、そのあとのクメール朝の繁栄により、自己のもつ仏教系文化に大きな誇りをもつようになったのである。しかし、一九九〇年代に入ると、経済力にまさる両隣のベトナムとタイとが、カンボジアを保護しながらも食い合うという形がつくられ、カンボジア人の地位は後退している。

クメール朝の最盛期は一二世紀はじめから一三世紀はじめで、その時期に大寺院アンコールワットや都城であるアンコールトムがつくられた。

一三世紀末から、クメール朝はタイのアユタヤ朝の圧迫を受けるようになった。一四世紀後半には、数度王都アンコールが陥落する事態にいたり、クメール朝は一四三二年、都をスレイ・サントールに遷^{うつ}さざるを得なくなった。

●隣国の脅威とフランス支配からの独立

スレイ・サントールに移った後のカンボジア王朝は、後クメール朝とよばれる。後クメール朝はまもなく都をプノンペンに遷した。それ以来、そこはカンボジア民族国家の中心地としてつづくことになる。

このころから、カンボジアはシャムとベトナムの阮朝^{げん}との圧迫に苦しむことになる。そして、カンボジアは一八四一年に阮朝にいったん併合され、その四年後にシャムの助けを受けて独立を回復した。

一八六三年になってカンボジアのノロドム王は、シャムの圧力に耐えかねてフランスの保護領になった。これにより、カンボジアはやがてフランス・インドシナ植民地に組み入

紀元前二世紀から二世紀にいたる秦漢時代を中心とする時期に、中国南部の先住民族が漢族に南方に追われ、雲南からミャンマーにいたる範囲に広がった。かれらは、移住前に統一国家をもっていなかったため、移住先で思い思いの文化を育て、きわめて多くの少数民族に分かれた。

ミャンマーの主な民族



「ミャンマーの民族問題は漢族が生み出した」といえば、いいすぎかもしれない。かつてミャンマーの山岳地帯から雲南を経由する道が、中国文化圏と東南アジアとの最短距離とされた時代があった。

多くの少数民族から成る ミャンマーの成り立ち

●一三〇余りの少数民族をめぐる難問とは

一九八九年にビルマは、国名をミャンマーと変更した。これは、それまでビルマを支配していた軍事政権が国外に植えつけた悪い印象を消し去るためのものであった。

ビルマは仏教国で、ビルマの庶民はきわめてまじめで親切な人々だといわれる。ところが、独立後のビルマの政情は慢性的に不安定であった。これはビルマが少数民族をめぐる政治問題を多くかかえていたことによるものである。

ミャンマーの総人口の約七〇パーセントが、ビルマ族である。ところが、その他に一三〇余りの少数民族がいる。主な民族を左の地図に示した。かれらの大部分は国境地帯にいる弱小集団であるが、なかにはシャン州のシャン族やモン州のモン族のような比較的有力なものもいる。そして現在、一六の少数民族が政府から分離独立を求める運動をつづけて

17世紀頃のミャンマー



●なぜ少数民族の反政府活動が続くのか

ニウヤウン朝（タウングー朝）は、一七五二年にモン族に倒された。しかし、その年にビルマ族のアウンゼーヤが、モン族を破ってビルマ統一を果たした。これを、コンパウン朝という。

コンパウン朝は、アッサム、マニプールなどのインドとビルマとの中間地帯の小土侯国群を支配しようともくろんだが、そのことによりすでにインド支配を確立していたイギリスとの紛争が起こった。

そのため、一八二四年、一八五二年、一八八五年の三度にわたる英緬戦争（えいめんイギリスとビルマとの間で行なわれた戦争）が起こり、第三次英緬戦争の後にビルマ全土はイギリス領にされてしまった。

第二次大戦後、独立運動が高まり、ビルマは一九四八年に独立を果たし、社会主義国家をめ

●ビルマ統一までの民族抗争の展開

ビルマとよばれる地域の国家づくりの動きは、イラワジ川流域の平野部から起こった。一世紀半ばにビルマ族のアノーヤターが象軍団を活用して、その地域のビルマ族の小国をつぎつぎに征服していったのだ。

この王朝は、パガン朝とよばれるが、パガン朝が仏教保護を唱えたため、国都のパガンには多数の寺院がつくられた。また、モン族が用いていた文字を取り入れて、ビルマ文字の表記がはじまった。

パガン朝はモンゴルの侵入によって滅んだが、その混乱の後に、一四世紀はじめにシャン族のビンヤ朝がたった。

しかし、シャン族の支配は不安定で、しばしば王朝交代がなされたうえに、長期にわたってビルマ族、モン族との抗争に苦しめられた。

一六世紀にビルマ族のタウングー朝がビルマを統一した。ビルマ王バイナウンは、ポルトガル人傭兵ようへいと鉄砲を活用し、シャン族、モン族を制圧したうえ、一時はタイ族の諸王朝も支配下においた。しかし、バイナウンの没後、タウングー朝（後にニュウヤウン朝とよばれる）は衰退した。

3
章

宗教対立から国境線を
争った民族摩擦の爪痕

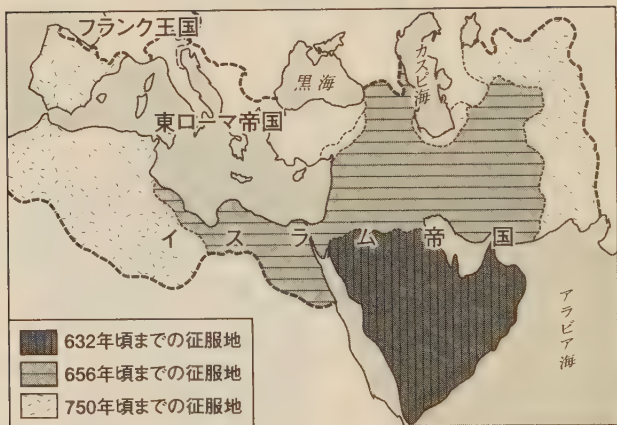
ざした。ところが、その実態は「社会主義」の名のものとビルマ族の軍事政権の独裁政治であった。

イギリスはビルマ族の多いビルマ中心部を直轄地として、少数民族の住む山岳地帯を間接統治していた。ビルマ族は重税に苦しみ、イギリスの分断統治を「少数民族の優遇策」とみなして憎んだ。

このことがもとで、独立後の軍事政権が、少数民族に圧迫を加えるようになった。その結果、かつてのイギリス支配のほうがよかったと考える少数民族が、分離独立を求めはじめた。

一九四九年の、カレン族の武装蜂起をはじめとして、少数民族の反政府活動がしきりに起こった。それに、軍事政権に反発する民衆の民主化運動が加わり、ミャンマーでは長期にわたって不安定な政情がつづくことになった。

イスラム帝国の発展



この「アラブ」は、きわめてあいまいな概念である。本来ならアラビア砂漠の遊牧民だけが、アラブであるはずである。しかし、アラビア出身のマホメットがイスラム教を起こし、それが周囲の民族に大きな影響を与えた。これによって、イスラム教誕生の七世紀以後にアラブ的文化を身につけた者も「アラブ人」とよばれるようになった。それにより、肌の色の白いシリアの人から、エジプト南部やスーダンの黒人まで、アラブ人とされるのである。

●スンニー派とシーア派との根強い対立

イスラム教は、六二二年のヘジラ（マホメットのメダイナへの移住）をイスラム教の起こりとする。そして、教祖マホメットは六三〇年にアラビア半

スンニー派とシーア派の抗争から アラブ世界の歴史を探る

●イスラム教圏「アラブ」の定義とは

イスラム教は、キリスト教、仏教とならぶ世界三大宗教の一つである。そして、今日ではイスラム教圏であるアラブ世界が、国際情勢に大きな影響を与えるようになってきている。それは、キリスト教徒や仏教徒のまとまりが弱いのに、イスラム教徒が強い団結力をもっているからである。中近東の諸国は、しばしばアラブの名のもとに団結して行動する。

イスラム教はスンニー派とシーア派に分かれるが、バグダッドに首都をおくイラクは、自国をスンニー派の正統の後継者と位置づけて、シーア派のイランとイラン・イラク戦争を起こし、ユダヤ教徒であるイスラエルと対立している。

また、イラクはクウェートを「アラブの大義に違反した」と責めて、クウェート出兵を行ない、それが一九九二年の湾岸戦争を引き起こした。

フランク王国の軍勢に破れた。これによつて、イスラム勢のヨーロッパ侵入は、イベリア半島までで食い止められた。

このため、いったんイスラム化を経験したスペイン、ポルトガルの文化と、フランスの文化とが異なる性格をもつものになつていった。

それに対し、アリーの後継者と称するシーア派のアブル・アッバースは、七五〇年にウマイア朝に代わつてアッバース朝をたてた。九世紀から一一世紀にかけて、アッバース朝の都バグダッドでイスラム教が大いに繁栄した。

七五六年にスンニー派のアブデラーマン一世は、アッバース朝からイベリア半島を奪い、後ウマイア朝をつくつた。これ以後、スンニー派とシーア派との根強い対立がつづく。アッバース朝の衰退後、イスラム教の諸勢力の交代が激しく、イスラム世界全体を押さえる勢力はあらわれなかった。それでも、イスラム教徒の間には、自分たちはアラブ人であるとする意識が強く残つた。

●アラブ世界を再編する

第一次世界大戦の時点で、スンニー教の勢力圏の主要部分はおスマントルコの支配下に

アッバース朝と後ウマイヤ朝



島を統一し、東西に征服活動を繰り広げた。マホメット以下の四代の正統カリフの時代のイスラム教徒の団結は固かったが、やがて教団の中でスンニー派とシーア派との対立が生じた。

六六一年にスンニー派のムアーウィヤは、四代目カリフでマホメットの従弟であったアリーの率いるシーア派を排してウマイヤ朝をたてた。そして、これ以後は信者が選んだ正統カリフに代わり、ムアーウィヤの子孫が代々カリフを世襲した。

ダマスクス（いまのシリアの首都）に都をおいたウマイヤ朝もまた、東西に征服活動を繰り広げ、ヨーロッパにも侵入した。

七三二年にウマイヤ朝はフランスへの侵入をもくろんだが、トゥール・ポワティエの戦いで

パレスチナで繰り広げられる ユダヤ人とアラブ人の興亡

●イスラエルとPLOの戦い

近年の大きな国際紛争のもと、すべてパレスチナでつくられたといつてよい。その対立は、ユダヤ教徒とイスラム教徒との歴史的な反目を受けてつくられたものである。

現在、アラブ人の居住地の中に、孤島のようなユダヤ教国イスラエルがある。さらに、その首都であるエルサレムは、ユダヤ教の聖地であるとともにイスラム教の聖地ともされる。キリスト教にとっても、エルサレムはイエスの処刑の地である。

さらに、イスラエル建国のときにパレスチナを追われたアラブ系の人々が、故郷への帰還を願ってPLO（パレスチナ解放機構）をつくり、反イスラエル活動をする。

このような何重もの要因のうえに、深刻なパレスチナ紛争が繰り広げられた。しかし、近年になってようやく、アメリカの仲介によりイスラエルとPLOとが歩み寄りをみせて

あった。そして、シーア教徒はイランに集中していた。

第一次世界大戦でトルコが敗れたために、トルコ治下の諸民族を民族自決の方針にもとづいて独立させることになった。そして、そのときの国境の線引きは戦勝国であるイギリスとフランスの指導のもとになされることになった。

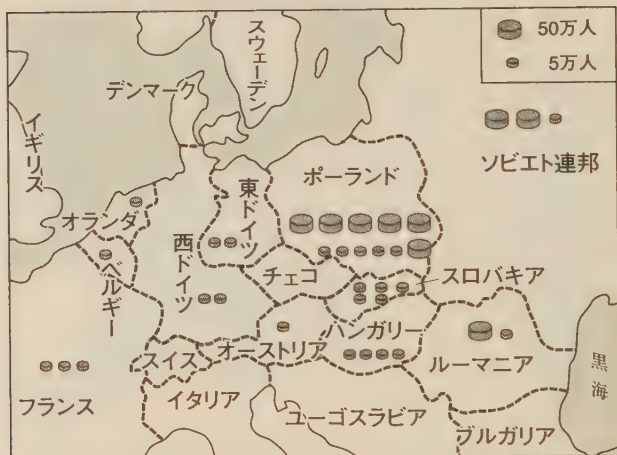
これが、後にいくつもの紛争の種子を残した。

イラクは、第一次世界大戦後にイギリスの委任統治領になった。このときの委任統治領にクウェートも含まれていたが、いまのヨルダンからイスラエルにかけての地域もイギリスが委任統治していた。

民族運動の高まりのなかで、一九二一年にイラク王国が成立し、一九三二年にその独立が国際的に認められた。このとき、クウェートは、イギリスの保護下に残った。ヨルダン（ケラク）は一九二二年にトランスヨルダン土侯国となっている。

クウェートは一九六一年クウェート土侯国として独立し、イラクは一九五八年の革命で共和制となった。そして、近年イラクのクウェート併合の企てがなされたのである。

第二次大戦中に殺されたユダヤ人

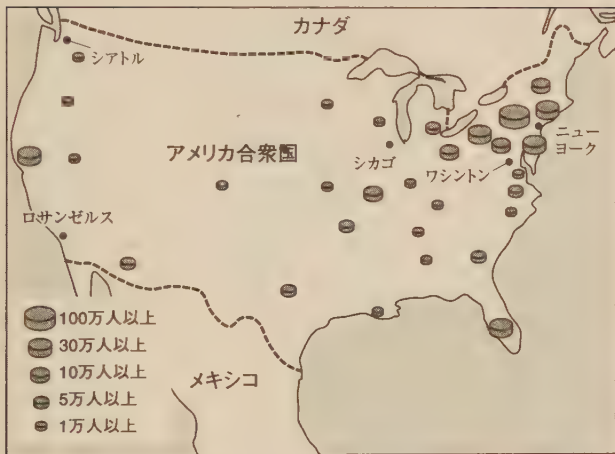


(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

放や、中世のペスト流行時のユダヤ人迫害などの多くの例が知られている。しかし、その最大のものは、二〇世紀にナチスドイツの手でなされた。概算で、六〇〇万人のユダヤ人が迫害を受けたと記録されている。

今日のヨーロッパのユダヤの総人口が三〇〇万人足らずであるから、ナチスの犠牲者の数の多さに驚かされる。アメリカには、六〇〇万人足らずのユダヤ人がおり、かれらは強い経済力をもち、ユダヤ・ロビーとしてアメリカ政界を動かしている。今日のユダヤ人は、イスラエルの民族国家での生活を望む者と、先進国での豊かな生活を好む者とに分かれる。そして、後者が民族差別をなくそうとする運動を積極的に繰り広げている。

アメリカのユダヤ人の分布



(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

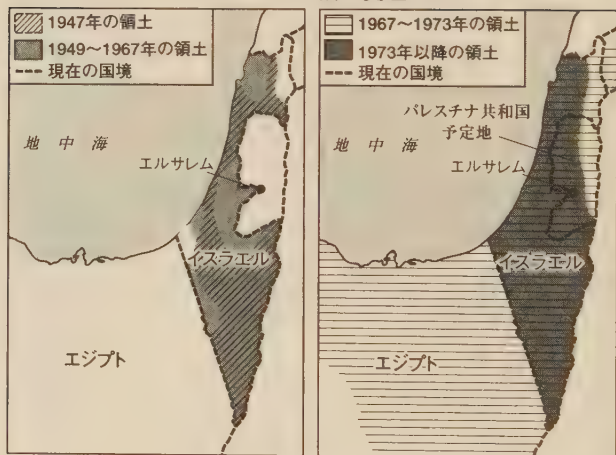
いる。

●ユダヤ人迫害の歴史とは

前に述べたが、ローマによって本拠を追われたユダヤ人は、各地に散っていった。かれらは国を失ってもユダヤ教のもとに団結を保ちつづけた。そして、中世の欧州各地でユダヤ人の集団の活躍がみられるようになった。

かれらは商売上手で、多くの成功者を出した。しかし、ユダヤ人の有力者はキリスト教徒で構成される西洋の上流社会に溶け込まず、ユダヤ人だけの閉鎖的な集団の中で活動した。このことがヨーロッパ人に警戒心をもたせることになり、幾度もユダヤ人迫害がなされた。歴史上、スペインによるユダヤ人の国外追

イスラエル領の変遷



ところがイギリスは、第一次大戦中に、メッ
カの大守フセインに小アジアをのぞくトルコ領
をアラブ王国として独立させる約束をしていた。
イギリスは、サイクス・ピコ協定でオスマン帝
国領の非トルコ地域をイギリスとフランスとで
二分することを決めていた。

このイギリスのあいまいな態度が、第一次大
戦後のパレスチナの混乱をもたらしたといえる。
国際連合は、一九四七年にパレスチナをイスラ
エルとアラブ国家に分割し、エルサレムを国際
管理下におくことを決定した。

ところが、イスラエルもアラブ側もそれに不
満をもち、両者の間で四回にわたる中東戦争が
起きた。これによって、いまのイスラエルの領
域が定まった。

第一次大戦後の英仏の勢力図



●パレスチナの混乱をもたらしたのは何か

一九世紀末のロシアでシオニズム運動が起こり、それがヨーロッパに広まった。シオニズムとは、ユダヤ人の故郷であるパレスチナに帰ろうとするものである。

そして二〇世紀に入ると各地のユダヤ人がパレスチナに移住するようになり、一九三〇年代にその動きが加速した。それに対し、もともとパレスチナに住んでいたアラブ人が反発した。

そのため、ユダヤ人とアラブ人との武力衝突

がしばしば起こった。そのころパレスチナは、イギリスの委任統治領であつたが、イギリスは一九四七年にパレスチナにおける治安維持能力を失い、撤退した。

これより前の一九一七年に、ユダヤ人財閥ロスチャイルド家とイギリス政府の交渉をもとに、バルフォア宣言が出されていた。それは、パレスチナにユダヤ国家を建設することを約束したものである。

フェニキア人の居住地



ン周辺、アフリカ北岸、イベリア半島南岸の三か所に変わった。そして、紀元前九世紀ごろにつくられたカルタゴが、しだいに繁栄していった。しかし、カルタゴはポエニ戦争でローマに敗れ滅亡し、フェニキアの人々もアッシリアの征服を受け、アッシリアの海軍に組み入れられた。

●レバノンをキリスト教国にする地理的理由

フェニキアがアッシリアに併合された後の地中海東岸は、南下あるいは北上する征服者たちの通路となっていた。しかし、奥地のレバノン山脈とベカー高原は征服者に荒らされることがなかったため、そこにフェニキア人の子孫が多く残ったといわれる。

そして、オスマントルコ支配下の一七〇一八世

古代フェニキア王国の末裔 レバノンの宗教紛争

●フェニキアの繁栄とその勢力圏は？

レバノンには、シリアとイスラエルとに国境を接する小国である。その面積は岐阜県ほどときわめて小さいが、レバノン人は自分たちはフェニキアの正統の末裔まつえいであるとする誇りをもっている。

フェニキア人は、ギリシア・ローマ時代（古典古代）に、ギリシア人、ついでローマ人と地中海世界に覇を競った航海民である。フェニキア人は、紀元前一五世紀ごろから地中海沿岸のあちこちに町をつくり、都市同盟を形成して繁栄した。アルファベットをオリエントから西方に伝えたのはフェニキア人である。

紀元前九世紀か一〇世紀ごろ、フェニキア人は小アジアにトロヤ文化を築き繁栄したが、そこはまもなくギリシア人の勢力圏となった。そのためかれらの根拠地は、いまのレバノ

から分離しておかねばならないとする考えが強い。これは、レバノンのすぐ南にイスラエルがあるため、キリスト教勢力がそのユダヤ勢力をレバノンによって牽制しようともくろんだことにもとづくものである。

●あいつぐ国内の宗教戦争

レバノンのマロン派キリスト教は、六八〇年のコンスタンチノープル公会議で異端とされた宗派で、レバノン以外にはみられないものである。オスマントルコ時代の統計では、レバノンのキリスト教徒とイスラム教徒との割合は六対五であった。

周囲の国々からの移住によって、レバノンのイスラム教徒は、じわじわ増えている。しかし、主流派であるキリスト教徒がアラブ諸国と異なる親ヨーロッパ政策をとるため、現在にいたるまでレバノン国内のキリスト教徒とイスラム教徒との抗争がつづいている。しかも、反レバノン政府の立場をとるイスラム教徒であるPLOが、レバノンに活動の拠点をおいたことにより、その対立はさらに複雑化したのである。

今日のレバノンは、イスラム教徒の中の孤島として、親西欧政策をとるか、アラブ統合に参加するか判断を迫られているといえる。

紀に、「名望家」といわれるレバノンの有力者の間で、フェニキア人の政治的統合と独立とを模索する動きが強まった。しかし、かれらの間では、北部のマロン派キリスト教徒と南部のイスラム教徒との対立が根強かった。

この動きをみて、東方貿易の利権を確保しようともくろむフランスが、キリスト教徒保護の口実で、しばしばレバノンに軍事介入するようになった。一八五九年には、ターニユスの指導のもと、農民層がマロン派キリスト教の大地主に抵抗する農民共和国がつくられた。これをみてフランスは、キリスト教徒と聖地とを保護するという名目で、大がかりな軍事介入を行ない、農民運動をしずめた。

そして第一次大戦でトルコが敗れたため、トルコ領であったレバノンはフランスの委任統治領の一部になった。そのあとフランスは、キリスト教徒である名望家とよばれる地主層を保護する政策をとった。

一九四四年に、レバノンはシリアとともにフランスから正式に独立した。このとき、キリスト教徒とイスラム教徒との間で大統領をキリスト教徒とし、首相と国会議長をイスラム教徒とする協定がつくられた。

これに対し、ヨーロッパの強国の間には、レバノンをキリスト教国としてイスラム世界

旧ユーゴスラビア連邦



シア正教とは協調していけるが、ユーゴのイスラム教徒は周囲のキリスト教徒の目のかたきにされている。

●オスマントルコとオーストリアの争奪戦

オスマントルコの侵入以前のバルカン半島では、スラブ系のセルビア人が大セルビア王国を築いて繁栄していた。このため、トルコ勢力の後退のなかでバルカン半島各地に散ったセルビア人が、セルビア人居住地の統合をめざすようになった。

オスマントルコの成長のなかで、一三八九年にセルビア王国のコソボで、大がかりな戦闘がなされた。これに敗れたセルビア人は北方に追われ、トルコは空白地になったコソボに、イス

ユーゴ紛争の火種となった 大国2国の争いとは

●ヨーロッパの火薬庫・バルカン半島

バルカン半島は、二〇世紀はじめに「ヨーロッパの火薬庫」とよばれた。そこに多様な民族が入り乱れており、紛争の火種が絶えなかったからだ。実際、この「火薬庫」が、第一次大戦を引き起こした。

大戦後にユーゴスラビアがつくられたことによって、バルカン半島もいったんは安定したのだが、一九九一年のユーゴ崩壊が新たな対立を生み出した。

旧ユーゴには二つの文字、三つの宗教、四つの言語、五つの民族（実際は六つ）、六つの共和国、七つの国境があるといわれる。

そして、国内の民族間の対立を抜きさしならないものにしたのが、イスラム教とキリスト教との対立である。三つの宗教のうち、同じイエスの教えを受け継ぐカトリックとギリ

18世紀のオーストリアとオスマントルコ



ユーゴの主な民族分布



大セルビア王国とその周辺



ラム教に改宗したアルバニア人を送り込んだ。オスマントルコは一五世紀後半、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナを併合するが、コソボが早い時期にトルコ領になりイスラム化したことに注意しておきたい。

コソボ自治州では現在でも、セルビア人とアルバニア人との反目がつづいている。一九八八年には、セルビア至上主義をとる新ユーゴスラビアのコソボ自治州でのアルバニア人迫害に対し、NATOの介入がなされた。

前に述べたように、オスマントルコは一七世紀の最盛期には、バルカン半島全土を支配下におき、ハンガリーの一部まで手を伸ばしていた。しかし、一八世紀にはハプスブルク家（オーストリア）が南下策をとり、いまのスロヴェニアと北部クロアチアを領有した。

そして、南部クロアチアとセルビア、モンテネグロ、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナは両者の奪い合いとなり、この対立は第一次世界大戦までつづいた。そして、オス

なぜドイツ統一は 他の国より遅れたのか

●ドイツで起きた最後の宗教戦争

一五一七年にはじまるマルチン・ルターの宗教改革をきっかけに、ヨーロッパ全域に旧教（カトリック）と新教（プロテスタント）との対立が広まった。一国内の貴族が旧教徒と新教徒とに分かれて争った国も多く、旧教国と新教国との大がかりな戦争が幾度も行なわれた。フランスのバロア朝は、一五八九年に国内の旧教の貴族と新教の貴族との抗争がきっかけで滅んでいく。旧教の大国であったスペインは、宗教対立から、新教国イギリスと争い、一五八八年のアルマダ戦争で大敗して衰退した。

そして、一六一八年から一六四八年にかけて起こったドイツの三十年戦争は、最後の宗教戦争といわれる。このとき、ヨーロッパの大部分の国が旧教側と新教側とに分かれ、ドイツの内戦に介入して長期にわたって争った。

マントルコとオーストリアからさまざまな影響を受けたことにより、旧ユーゴの地域の民族、言語、宗教が複雑に入り乱れることになった（前ページの図参照）。

●キリスト教とイスラム教との深刻な対立

ユーゴ崩壊後の一九九二年、ボスニア共和国の独立をめぐり深刻な内紛が起きた。そこには、ムスリムとよばれるイスラム教徒が多かった。かれらは、もとはセルビア人やクロアチア人であったが、オスマントルコの支配下にイスラム教徒に改宗した人々であった。

クロアチア人とムスリム人とがボスニア独立を唱え、セルビア人がそれに反対であった。そして、セルビア人のボイコットする国民投票で独立が決まると、ムスリム人に対するセルビア人の武力攻撃がはじまった。さらにユーゴ連邦軍が、セルビア人に加担して介入してきた。このため、ボスニア紛争はムスリムを中心に二〇万人あまりの死者を出した後に、NATO（北大西洋条約機構）軍の活躍でようやくおさまった。

この事件の背景に、キリスト教徒であるセルビア人とイスラム教徒との対立があるのは明らかだが、旧ユーゴには現在でも多くの民族紛争のきっかけが眠っている。

うとする新しい発想の貴族たちと、民衆を力で押さえようとする古い発想の貴族たちとの対立でもあった。ボヘミアの旧教と新教との勢力は拮抗していた。ところが、ハプスブルク家のボヘミア王フェルディナンド二世は頑固な旧教徒で、反宗教改革を打ち出した。そして、新教の民衆が王の使者に暴行を加えたことをきっかけに、ボヘミア貴族が反乱を起こし、議会は王の廃位を決議した。

王の側と議会側それぞれに、旧教、新教寄りのドイツ貴族や外国が加担した。スペインは旧教を支持し、デンマークとスウェーデンは新教徒の後押しをした。

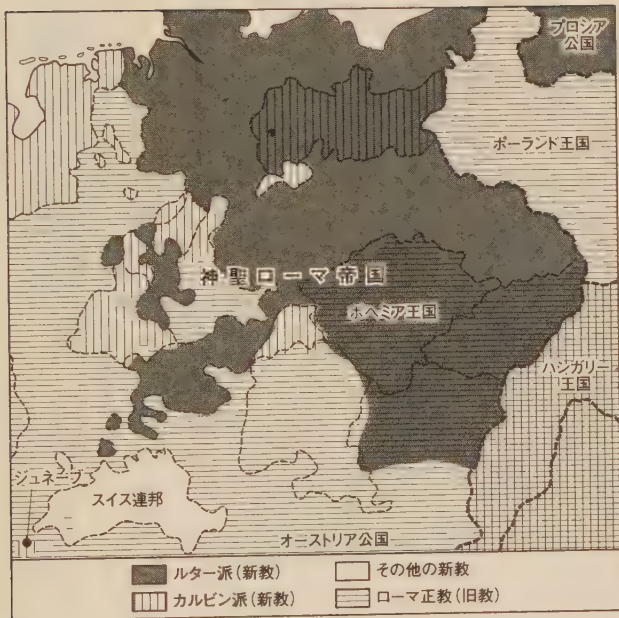
フランスは旧教国であったが、フランス王ルイ十三世は、ドイツの旧教派の中心であるフェルディナンド二世がボヘミア王から神聖ローマ皇帝（オーストリア皇帝）になったために新教についた。この機会に、オーストリアの領地を奪おうと考えたのである。

両陣営が戦い疲れた後に、和平が成った。そして、そのときのウエストファリア条約で信教の自由が保証されることになった。

●ドイツ統一への歩み

三十年戦争の間にドイツ国内は、外国の軍勢によって大いに荒らされた。この戦争の間

ドイツ地方の宗教の分布



●三十年戦争とその終結

ルターの宗教改革は、ドイツではじまった。そのためドイツでもつとも旧教と新教との対立が激しく、ドイツ国内では旧教徒と新教徒とが混在してにらみ合う形が長くつづいた。

ルター派は、比較的穏健であったが、ルターの影響で一五四一年にカルビンがジュネーブで宗教改革をはじめた。そしてカルビン派が商工業者の支持を受けたことにより、カルビン派とカトリックとの対立が強まった。これは、商工業をさかんにして国を豊かにしよ

インドとパキスタンの長期にわたる 紛争の火種は何か

●ヒンズー教とイスラム教の複雑な抗争

イギリスからの分離独立以来、インドとパキスタンとは長期にわたって争っている。これは主に、インドのヒンズー教とパキスタンのイスラム教との宗教的対立から来るものである。

これにシーク教徒がからんでいる。シーク教徒は、ヒンズー教の側からみればイスラム教徒になり、イスラム教の側からみればヒンズー教徒になる複雑な立場にある。

インド独立後のガンジーの暗殺がなければ、インドのヒンズー教徒とイスラム教徒との対立はここまで深刻化しなかったのではないかともいわれている。かれは熱心なヒンズー教徒であったが、一九四七年のインド独立にあたってヒンズー教徒とイスラム教徒との協調を説いた。そのために一九四八年にヒンズー教徒に暗殺されてしまった。

17世紀頃のプロシアとオーストリア



に、ドイツの人口が四〇パーセント近く減少したと記録されている。

この三十年戦争が、ドイツ人の外国人に対する反感を生み、民族意識を高めたことは確かである。

イギリス、フランスの民族国家への動きが一五世紀に起こったのに二〇〇年遅れる形で、ドイツ統一を求める声が生まれてきた。しかし、当時のドイツでは、オーストリアとプロシアという二大勢力が対立していたため、ドイツ統一は容易には成らなかった。

その後、プロシアの手によるドイツ統一まで、二〇〇年余りの長い道のりを必要としたのである。

ーに近く、カシミール地方はパキスタンの首都イスラマバードのそばである。

●第一次印・パ戦争とその後

インドとパキスタンとがイギリスから分割独立するにあたって、インドにあった五六二の藩^{はん}王国（マハラジャが支配する小王国）は、どちらかに帰属しなければならなくなった。

このときカシミール藩王国は、その住民の約八〇パーセントがイスラム教徒であったが、ヒンズー教徒である藩王が勝手にそこをインドに帰属させてしまった。

そこで、住民の意向を受けたパキスタンが、武力でカシミール地方を領有しようと、一九四七年から四九年にいたる第一次印・パ戦争を起こした。

このとき、両国は国際連合の調停により停戦し、カシミールは停戦ラインで二分割されるこ



ゴール朝の領域



ヒンズー教は、古代のバラモン教から発展したインドの民族宗教であったが、一二世紀以後、インドはイスラム系王朝の支配を受けるようになった。これによって、インド世界に多数派であるヒンズー教徒と、少数派のイスラム教徒とが生じたのである。

インドのイスラム化は、一二世紀末から一三世紀はじめにかけてなされた。それは、アフガニスタンのイスラム系勢力ゴール朝のインド侵入にはじまった。

もつとも、この二つの宗派は、つねに対立していたわけではなかった。イスラム系のムガル帝国のもとでは、タージマハル廟に代表されるような、インド文化とイスラム文化とが融合したインド・イスラム文化が開花している。

近年のインドとパキスタンとの対立は、両国の境界に近いカシミール地方と、その南方のパンジャーブ州とをめぐってなされている。パンジャーブ州はインドの首都ニューデリ

パンジャーブの分割



インド政府が、シーク教徒の多い新しいパンジャーブ州を冷遇したのである。そのため、シーク教徒の政党アカル・ダリによって、パンジャーブ語州を創設する運動がはじめられた。かれらは、シーク教徒のヒンズー教徒からの独立をめざし、自治権拡大を要求しつづけた。

この動きの中で、一九八一年にシーク教徒過激派による即時独立を求めるカリスタン運動が起こった。かれらは、一九八四年にシーク教の本山ゴールデン・デンプルを占拠する事件を起こした。このようなテロ活動は、パキスタンの軍事的援助によってなされた。

インドのインディラ・ガンディ首相がインド軍にシーク教徒攻撃を命ずると、シーク教徒の側は首相を暗殺した。その後のインド政府のシーク教徒弾圧により、かれらのテロは一九九二年ごろにようやくしずまった。しかし、この紛争が再発するおそれは大きい。

とになった。

このあとカシミール地方で第二次、第三次の印・パ戦争があり、第三次印・パ戦争のあとシムラ協定という和平協定が成立した。しかし、その後も、毎年のように両国の小ぜり合いが起こっている。

●パンジャブ州のシーク教をめぐる紛争とは

シーク教は、インド北西部のパンジャブ州で、イスラム教とヒンズー教の影響を受けて成立した宗教である。シーク教徒は、頭にターバンをまく風習をもっている。私たちになじみ深い、インドの蛇^{へび}つかいの衣装は、シーク教徒の風俗にもとづくものである。

インドとパキスタンとの分離にあたって、パンジャブ州は二分割されることになった。これ以前にイスラム教徒とシーク教徒とが不仲であつたために、パンジャブ州分割にあつて、約五〇〇万人のシーク教徒がパキスタン側からインド側のパンジャブ州に移住した。

このとき分けられたインド側のパンジャブ州で、その後多くの混乱が生じることになった。

16世紀半ばの東南アジアのオランダ領とポルトガル領



●セイロンを巡る主導権争い

一五世紀末ごろに、ヨーロッパでポルトガルの勢力が後退したことによって、オランダのセイロン進出がはじまった。まずオランダが一六世紀はじめに、香料の産地であるモルツカ諸島の支配をはじめた。

ついで、かれらのインドネシアの各地での活躍がはじまる。このようなオランダにとって、セイロンは何としても確保せねばならない交通路であった。オランダはモルツカを得て間もなくジャフナを得た。さらに一六世紀半ばにトリンコマリとポルトガル領であったコロンボの支配をはじめた。

イギリスのインド支配が強化されるなかで、一七九五年にセイロンをめぐるイギリス軍とオ

スリランカが抱える 根深い宗教対立の原因は？

●ヨーロッパ人のセイロン進出

インドの東南のセイロン島は古くから、その東方のインドネシアや中国と、その西方のインドやイスラム世界とを結ぶ航路の要地として栄えた。そこには古くはヴェッダ族などの多くの部族がいたが、紀元前五世紀にインドから移住してきた人々が、もとの集団を取り込んで王国をつくった。このときの移住者が後のシンハラ人である。紀元前三世紀にセイロンは小乗仏教を国教とした。

歴代の王朝は、丘陵地帯に都をおき、水田耕作と貿易とによって繁栄した。そのようなセイロンの諸王朝はシンハラ（獅子の子孫）とよばれた。

一五一〇年にポルトガルがセイロンのコロンプを領有して、そこを東西貿易の拠点の一つとした。これが、ヨーロッパ人のセイロン進出のきっかけになった。

ンハラ人が人口の七五パーセントを占め、残りがタミル人となっている。

政府はシンハラ・オンリーを唱え、一九四九年にタミル人の選挙権を剥奪した。これをきっかけにシンハラ人とタミル人との長期にわたる対立がはじまった。

独立後のスリランカでは、統一国民党とスリランカ自由党とが与野党を交代しながら、政権を担当した。いずれもシンハラ人の中流階級の支持を受ける政党であった。

一九五八年にタミル人とシンハラ人との間で、最初の民族暴動が起きた。これは、シンハラ民族主義的考えをとるスリランカ自由党が、仏教系勢力と結んで政権をとり、シンハラ語を唯一の公用語にする政策をとろうとしたことに対する、タミル人の反発から起こったものである。

これに対し、バンダラナイケ首相がタミル人勢力との妥協をはかり、仏教徒の嫌う共産主義を唱えるソビエト連邦との国交樹立を行なった。そのために首相は、仏教徒の急進派に暗殺されたのである。一九七〇年代に入るとタミル人の分離独立運動がさかんになる。かれらはゲリラ集団タミル・イーラム解放の虎（LTTE）を組織し、今日まで幾度もテロ活動を行なっている。

シンハラ人とタミル人の分布



ランダ軍との戦闘が起きた。これに敗れたオランダはセイロンを放棄し、セイロンは一八一五年に正式に英領に組み入れられた。

イギリス支配のもとで、イギリス人の茶やゴムの農園経営がさかんになった。一九世紀にイギリス人は、セイロン対岸のタミル・ナードゥ州から、ヒンズー教徒であるタミル人の労働者を多くセイロンに連れてきた。しかし、イギリス人はもとの住民で仏教徒であるシンハラ人を、タミル人より優遇する政策をとった。

●シンハラ人とタミル人との対立の始まり

イギリス支配のもとでは、仏教徒とヒンズー教徒との対立は表面化しなかった。しかし、一九四八年に支配層であるシンハラ人の主導で、セイロンはイギリス連邦内の独立国となった。後にセイロンの国名がスリランカと変わる。

セイロン島は、シンハラ人の居住地域とタミル人の居住地域とに分かれている。そして、シ

ローマ帝国時代のアルメニア



大アルメニアは後にササン朝ペルシアに併合され、ついでアルメニア人はイスラム諸勢力の支配下におかれる。

それでも、かれらは民族宗教を守り、イスラム教圏の中のキリスト教の飛び地といった形を保っていた。

●イスラムに対抗し、独自の宗教を守る

一一世紀末から一四世紀末にかけての約三〇〇年にわたって、アルメニア人は小アジアの一部に小アルメニアをつくり、イスラム勢力から自立していた（次ページの地図参照）。

かれらは、西ヨーロッパ諸国の後押しを受けて、イスラム教諸国と対抗した。

十字軍の遠征にあたっては、小アルメニアは

最古のキリスト教国を興したアルメニアが なぜ世界で孤立しているのか

●アルメニアが最古のキリスト教国となつたわけ

アルメニアは、キリスト教を国教にした世界最初の国である。アルメニアがキリスト教国になつたのが三〇一年で、ローマがキリスト教を国教にしたのが三九二年である。アルメニアのキリスト教は、アルメニア教会とよばれる。

アルメニア人は紀元前一世紀ごろ、黒海とカスピ海との中間に大アルメニア古代帝国をたてたと伝えられる。

地図をみてもわかるように、そこはローマ文化圏とペルシア文化圏（パルチア王国、のちのササン朝ペルシア）とはさまれる位置にあり、たえず両者の圧迫を受けつづけた。そしてペルシア人によるゾロアスター教の押しつけが強かったために、アルメニア人はそれに反発してキリスト教徒になつた。

アルメニアとナゴルノ・カラバフ



●オスマントルコとロシアの支配政策

アルメニア人居住地である黒海とカスピ海との間は、一六世紀以来、ロシア、オスマントルコ、ペルシアの三勢力の草刈り場となった。そして、最終的にアルメニア人の多くは、ロシアの支配下にあった。

このときロシア政府は、アルメニア人を「カフカスのユダヤ人」として、かれらと周囲のアラブ系民族とを対立させることによって、その地域の住民のロシア支配への反感をそらす政策をとった。

第一次大戦中に、アルメニア人の民族自決を求める運動が高まった。それに対し、オスマントルコは支配下のアルメニア人を恐れて、アルメニア人をメソポタミア砂漠に強制移住させた。アルメニア側はこのとき、一五〇万人以上のアルメニア人が虐殺されたと主張している。

小アルメニア王国とその周辺



貴重な前線基地となった。

そして、この小アルメニアが滅びたあと、アルメニア人は流浪の民となった。かれらの中に商才をもった者が多かったために、西ヨーロッパやアメリカで成功者となったアルメニア人も多い。

現在、アルメニア人の総数は約六五〇万人であると考えられる。その中の約四六〇万人が、旧ソビエト連邦に集中している。そして、その中の三五〇万人ほどが、いまのアルメニア共和国に住んでいる。

残る二〇〇万人足らずのアルメニア人は、トルコ、イランやヨーロッパ各地、アメリカに居住している。

4
章

列強に挟まれ、翻弄された
悲劇の民族たち

一九二〇年にアルメニアはソビエト連邦内の一国となるが、そのときスターリンは、高學歷の者が多く商才にも富むアルメニア人の勢力拡大を恐れた。そして、アルメニア人が人口の八〇パーセント以上を占めるナゴルノ・カラバフをイスラム系のアゼルバイジャンの一部とした。

一九九一年に、アゼルバイジャンとアルメニアが、ソビエト連邦から独立した。それ以来、ナゴルノ・カラバフ自治州の帰属をめぐる両国が争いをつづけている。

武帝がおいた四郡



代の西日本と朝鮮南部の文化の共通性は多い。

また、中国北部で漢族と侵入者である騎馬民族系の人々との混血がしきりになされた。そのため、騎馬民族系と漢族の血を多くひく朝鮮北部の人は、朝鮮との国境近くに居住する中国人に強い親近感をもっている。

漢族の朝鮮半島への移住は、中国の戦国時代にあたる紀元前三世紀ごろはじまった。そして、朝鮮北部に中国系の箕氏朝鮮^{きし}が立ち、紀元前一九五年にそれが衛氏朝鮮^{えいし}に代わった。さらに、紀元前一〇八年に前漢朝の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡^{らくろうぐん}などの四郡をおい

て朝鮮半島北部を直接支配した。中国人の勢力は年とともに後退するが、四世紀はじめまでつづく。九州にあった奴国^{なこく}は後漢代に楽浪郡と通交し、邪馬台国は楽浪郡の南方におかれた帯方^{たいほう}郡と交流をもっていた。

●新羅による半島統一

四世紀になり、中国東北地方の騎馬民族が大

南北を強者にはさまれた 朝鮮半島の悲劇

●朝鮮文化を生み出した民族とは

「韓民族」ともよばれる朝鮮半島の住民は、きわめて複雑ないきさつで形づくられた。かれらは、いまはハングルで表記される独自の言語をもち、トウガラシや多様な香辛料を用いた韓国料理に代表される、きわめて強い個性をもつ文化を共有する。

中国文化と深くかかわるが、多くの独創性を含む文化が朝鮮文化である。これを生み出した人々は、三系統のアジア人の混血によってつくられた。

第一に、古くからの朝鮮半島の住民で、中国人に「韓族」とよばれた人々である。それに北方からの騎馬民族系移住者と、西方からの漢族の移住者とが混じり合って朝鮮民族ができたのである。

韓族の一部は、弥生時代のはじめに稲作文化をもって日本に渡ってきた。そのため、古

朝鮮半島の変遷



の広大な領域を得ている。

六世紀以降、新羅は中国の先進文化を取り入れている。しかし、新羅の統一の背景には、新羅王家が三国の中でもっとも韓族的であったことが朝鮮半島の住民の支持を受けやすかった点があつたとみられる。

● 李子朝鮮から南北分断までの勢力争い

一〇世紀半ばに、新羅に代わって高麗こうらいが興った。かれらは高句麗の後身だと自称した。

そして、高麗が倭寇わこうに苦しめられて滅ぶと、李り成桂せいけいが李氏朝鮮をたてた。一三九二年のことである。地図でみると新羅、高麗、李朝と、王朝が代わるたびに朝鮮の領域が北方に拡大していることがわかる。

新羅が朝鮮半島を統一したときには、新羅の領域はピョンヤンの少し北方までであつた。そして高麗の時代になると、黄海側では鴨緑江おうりょくこう（ヤ

5世紀末の朝鮮半島



挙して南下した。高句麗こうくりが楽浪郡らくろうぐん、帶方郡を落とし、本拠をいまのピョンヤン（平壤）のあたりに移したのである。その時期に、朝鮮半島南部では韓族の国家である百濟くだらと新羅しらぎがたっていた。

そして、朝鮮半島南端部は小国が分立する形をとっており、その地域は加耶かやとよばれていた。百濟では騎馬民族の文化が多く取り入れられたが、新羅では韓族の伝統が受け継がれた。高句麗、百濟、新羅を朝鮮三国という。

四〜五世紀に日本は加耶を勢力圏として、百濟と結び、しばしば高句麗と争った。ところが、六世紀に入ると新羅の勢力が急伸した。新羅は、加耶諸国を百濟と分割し、高句麗の南部をしだいに自領に組み込んでいった。

そして、唐朝と同盟を結び、六六〇年には百濟を、六六八年には高句麗を滅ぼした。さらに新羅は唐軍と戦い、六七六年には朝鮮半島から唐の勢力を一掃した。もっともこの一連の戦いで、唐朝は高句麗が支配していた中国東北地方

中国の諸王朝と 東トルキスタンとの抗争の経緯

●中国はなぜ西域支配をもくろんだのか

中国の諸王朝が「西域」^{さいいき}とよんだ東トルキスタンでは、おおむね小勢力が分立する形がつづいた。それゆえ、中華思想にもとづいて多くの属国を従えることを通じて、皇帝の権威を高めようとする中国の諸王朝によって、そこはもともと支配し、やすい地域とされてきた。

西域の商人は、東西貿易で利益を上げていた。また、内陸部である西域の諸勢力からみれば、中国方面が唯一の先進文化の流入路でもあった。そのため、中国と親密な関係をもつことが西域の人々にとっても利益につながった。

中国の西域への関心は、張蹇^{ちやうけん}の西域派遣をきっかけに高まった。匈奴^{きようど}の侵入に苦しむ前漢の武帝が、匈奴の後方の国と同盟を結んで匈奴を挟撃することをもくろんで、紀元前一

（ルー川）までが高麗領になる。しかし、そのころの日本海側のかんりの地域が、高麗の支配の外にあり、そこにはさまざまな騎馬民族がいた。

今日の咸鏡^{はむぎょん}北道、両江^{りやんがん}道と咸鏡南道、慈江^{ちやがん}道の約半分は朝鮮の領域ではなかったのである。李氏朝鮮の時代になってようやく、鴨緑江が朝鮮の北方の境界になったのである。

李朝のもとでは儒教政治がとられ、両班^{やんぱん}とよばれる厳しい身分制度がつくられた。韓国料理など独自の文化の多くは、李朝のもとで育てられたものである。

李朝は儒教思想から、中国の諸王朝と親密な交流をもったが、日本との関係を重視しなかった。中世に両国の貿易は私貿易の形をとっており、江戸時代に日韓の貿易は、対馬の領主宗氏を仲介になされた

明治政府は一八七六年に武力を用いて強引に江華島条約を結ばせて、李朝を開国させた。そして、日本の植民地政策の進展のなかで、一九一〇年に日韓併合がなされた。

そして三十数年にわたる日本支配の後に朝鮮の独立が成ったが、朝鮮半島はアメリカ寄りの韓国と、ソビエト連邦の勢力下にある朝鮮民主主義人民共和国とに分けられてしまった。この両国は激しく対立したが、近年、南北の歩み寄りがみられるようになった。

書かれたことはよく知られている。

実は玄奘は、日本仏教にも大きな影響を与えている。六五五年に渡唐した僧道昭^{どうしやう}が、玄奘の高弟となって学び、六六一年に帰国してから玄奘が開いた法相宗^{ほっそう}を日本に広めたのである。

玄奘の旅程をみると、かれがウイグルや西突厥の勢力圏の南方を西進したことがわかる。そして玄奘は、唐と幾度か対立したチベットをさけて迂回^{うかい}して西にまわり、唐の勢力圏の外れからインドのスードラ朝に入ったことがわかる。

玄奘の旅行が苦難に満ちたものであったことは確かだが、かれはつねに唐の役人の保護のもとに行動したのだ。

●ウイグル自治区の複雑な独立紛争

玄奘の西域旅行の時期のシルクロード上の唐朝に対抗する最大の勢力が、トルコ系のウイグル（回紇）であった。このことにより、後に中国の人々は蒙古人（モンゴル人）と区別する意味で、中央アジアのトルコ系の人々をウイグル人とよぶようになった。しかし、このトルコ系の遊牧民は、ふつうは自分たちのことをカシユガルに住む人をあらわす「カ

玄奘の旅程と周囲の国々



三十九年に張蹇を西方へ派遣したのである。かれは紀元前一二六年、大月氏国だいげつしとの親交を確立して帰国した（45ページの地図参照）。そして、これ以後、西域諸国の中国への入貢がさかんになった。

●西域を旅した玄奘のルート

唐の最盛期に、中国人の西方への関心が大いに高まった。唐の都長安で西域風の文化が生まれ、その成果の一部は日本の正倉院しょうそういんにも伝わっている。

この背景で、『大唐西域記』だいたうさいいききが広く読まれた。

『大唐西域記』は、六二九年から六四五年にかけて仏教を学びにインドにおもむいた玄奘げんじやうの旅行記であるが、これを下敷きにして『西遊記』が

欧米列強の分割がもたらした 太平洋の諸問題とは

●長年放っておかれた南太平洋

南太平洋の島々に対して、私たちは「南国の楽園」という印象をもちがちである。確かに観光客として訪れるサンゴ礁の島々は美しい。しかし、現在そこには、列強の植民地支配に由来するさまざまな紛争が起こっている。

南太平洋の島々は、大陸から遠く離れた位置にあり、そこには先祖代々の伝統的風習を伝える部族が平和に生活していた。ヨーロッパが大航海時代をむかえた後に、スペインがフィリピンを、オランダがインドネシアを、イギリスがオーストラリアとニュージールランドを獲得した。それらの地域は、アジア大陸から比較的近く、面積も広がった。しかし、そこよりさらに東方にある小さな島々は、ヨーロッパの強国の関心の外におかれていた。

一九世紀末にアフリカ分割が最終段階に入ったころ、列強の太平洋分割がなされた。そ

シユガリスク」とよんでいた。

一三世紀になつて、東トルキスタンのトルコ系の人々はモンゴルに征服された。その後モンゴル支配からチムール帝国による支配に代わつたが、チムール帝国も一六世紀はじめには衰退した。その後、西トルキスタンにはトルコ系の国々が興つたが、東トルキスタンでは小勢力の分立がつづいた。

そして一八世紀半ばになつて、東トルキスタン（カシユガル）は、清朝に征服され新疆省となつた。ウイグル人は、しばしば清朝に対して反乱を起こしたが、これは散発的なものが多かった。

しかし、二〇世紀に入つて東トルキスタンの住民が、しだいに自分たちはウイグル人だという意識をもつてまとまつていった。

中国は一九五五年、東トルキスタンを新疆ウイグル自治区としたが、その人々はしきりに分離独立運動を繰り広げている。自治区に漢族がさかんに流入したことや、そこにカザフ人やキルギス人、タジク人もいることが、問題をさらに複雑にしている。

目ざわりでたまらなかった。そのため、第一次大戦で日本が小笠原諸島につづくドイツ領を占領したあと、イギリスは外交交渉でビスマルク諸島をとり、そこをオーストラリアの委任統治領とした。

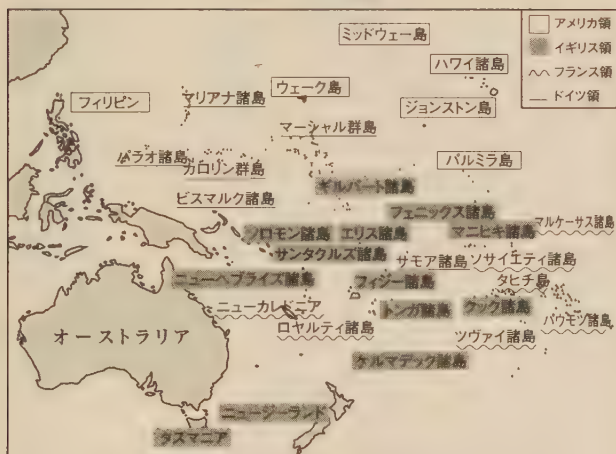
●南太平洋を悩ますさまざまな問題

キリバス、ナウル、サモアなど、第二次世界大戦後に独立した南太平洋の小国も多いが、アメリカ領とフランス領の島々の多くは、現在でもそのまま残されている。グアム島のように、アメリカ支配のもとで経済的に繁栄しているところもあるが、ポリネシアのフランス領の島々が、現在独立をめぐってフランスと争っている。これはタヒチの人々が、近くのムルロア環礁^{かんしょう}で行なわれたフランスの核実験に反発したことからきたものである。

フランス領ニューカレドニアでも、先住民族であるカナク族のフランス人の入植者に対する反発から独立運動が起きている。

一方、イギリス領から独立したフィジーでは、フィジー人とインドからの入植者との対立が深刻である。イギリス人が植民地でのサトウキビ農園の労働力として多くのインド人を連れてきたためである。

太平洋の分割



これは植民地支配において後発であったドイツが、この段階で帝国主義を強化したことが、イギリスとフランスの対抗心をかきたてたことによって起こったものである。

● 欧米諸国による南洋支配

そのとき、ドイツはフィリピンやインドネシア、オーストラリアに圧力をかけうる位置にあるマリアナ諸島やビスマルク諸島を得た。イギリスは、オーストラリアに近いフィジー、トンガなどをとり、フランスはもつとも辺地といえるタヒチやマルケーサス諸島を獲得した。そのころ、一八九八年の米西戦争に勝利したアメリカが、フィリピンやグアム島を得ている。

イギリスには、ドイツ領のビスマルク諸島が

ありがたがられたのである。いまでも残る中国手品は、そのような唐人の芸の名残をしめすものである。

ジプシーは、ヨーロッパの旅芸人の中の一部を占めるものにすぎなかった。そして、ヨーロッパの人々がかつて日本人が唐人の芸に拍手したように、自国の芸人よりオリエンタル風のジプシーをありがたがったことは確かである。

●ジプシーの発祥はどこか

英語の「ジプシー」の語は、「エジプシャン」がつまる形でつくられている。これは、ヨーロッパの人々が、かれらがエジプトから来たと考えていたことをあらわしている。

ジプシーは、一五世紀はじめにバルカン半島をへてヨーロッパに出現した。『パリ一市民の日記』は、一四二七年に一二人のジプシーがパリに到着したことを記している。これがジプシーの記事の初見である。

そこには、ジプシーはいったんキリスト教を捨てたため、ローマ教皇に七年間の苦行の旅を命じられたとする伝承が記されている。ジプシーは定住して農耕に従事することも、住民の中に溶け込むこともなかったともいわれている。

大国に迫害され続けた 少数民族ジプシーの歴史

●ジプシーとはどういう民族か

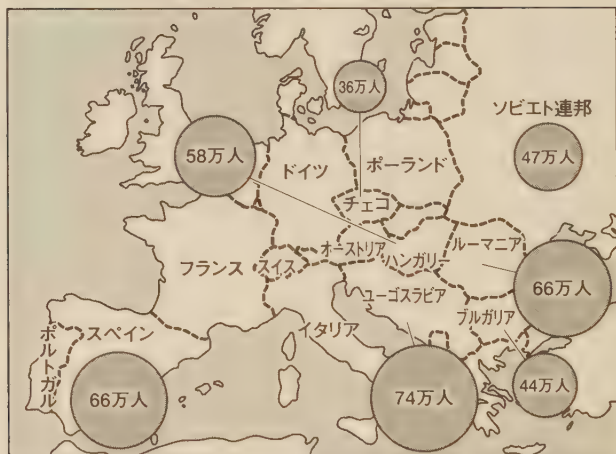
ジプシーは、ヨーロッパを中心に分布する少数民族で、日本などの一部の国を除く世界中に広がりを見せる。かれらは定住せず、馬車などで移動を繰り返してきた。

ジプシーといえば、私たちはフラメンコの悲しげな音楽や、長いスカートの美女、占い師、動物の曲芸などを思い浮かべる。ヨーロッパの文学作品には、育ちのよい青年とジプシーの娘の悲恋を描いたものも多い。

しかし、ジプシーの実態を知らない日本人は、ジプシーと旅芸人とを混同しているようにも思える。近代以前には、どの国でも村や町をめぐる旅芸人の集団がいた。人々は祭りのときに訪れる芸人を楽しみに待ちわびた。

中世の日本の旅芸人が、「唐人」とよばれる場合もある。異国からはるばる訪れた芸人が、

ジプシーが多く居住する国



手ただけでちやほやされるかれらに反感をもつ。それゆえ、スキヤンダルを起こした芸能人は、徹底的に叩かれる。近代以前の人々も、旅芸人に対してこのような私たちの感情に近いものをもって接したらしい。一五五四年のイギリスで、ジプシーであれば死刑とするという、すごい法令が出されている。

また、オーストリア皇帝マリア・テレジア（マリー・アントワネットの母）は、ジプシーに定住と改宗を命じる政策をとった。ジプシーに堅実な生活をさせようとしたのであるが、芸人が農民になれるはずもない。ジプシーたちは、オーストリアから他国へ逃げ去ってしまった。

このようなジプシーへの弾圧は幾度もあったが、最大のものは一九三三年にはじまるナチス

ジプシーの移動経路



(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

しかし、ジプシーの旅は七年で終わるものではなかった。言語学者の研究により、ジプシーの故郷がインド西北部であったことが確かめられている。

かれらは紀元前一〇〇〇年ごろ、西への移動を開始した。そして一二世紀のペルシアに、ジプシーの出現を伝える記録がある。

いまのところ、ジプシーはインドから小アジアまでゆつくり移動し、ヨーロッパに入ってからいくつものに分かれて各国に散っていったと考えられている。

●ジプシー迫害の歴史とその理由

現代人でも、芸能人のはなやかな生活にあこがれる。それとともに、歌や踊りや話が上

なぜクルド人は 祖国をもたない民族となったのか

●クルド人が国家を認められず分散させられたわけ

現在の中近東の国境線には、第一次世界大戦のあと、イギリス、フランスを中心とするヨーロッパ列強の手で一方的に定められたものが多い。そのときの線引きは、原則として民族自決の考えにもとづいてなされたことになっている。

ところが、この動きの中で民族国家建設の主張を認められなかった人々がいた。それがクルド人である。そのためかれらはトルコ、イラン、イラク、シリア、旧ソビエト連邦に分散させられることになった。クルド人の居住地は、クルディスタンとよばれていた。一九世紀末にその地域は、すべてオスマントルコの支配下にあった。そのころクルド人の民族運動が高まったが、オスマントルコはかれらを厳しく弾圧した。

第一次世界大戦に参戦して敗北したトルコは、一九二〇年にセーブル条約を結んで降伏

のジプシー絶滅政策である。かれらは、ジプシーはユダヤ人と同じくドイツ人の血の純潔をそこなうものであるとしたのだ。

ジプシーはユダヤ人とともに、アウシュビッツなどの強制収容所に送られた。収容所で殺されたジプシーは、五〇万人を超えるといわれる。

第二次世界大戦後になって、ようやくジプシーの人権を重んじる動きが起こった。現在、ジプシーはユーゴスラビア、ルーマニア、スペイン、ハンガリーに多く、世界全体でその人口は八〇〇万人程度だといわれている。前ページの地図からもわかるように、イギリス、フランス、ドイツといったヨーロッパの先進地には、ジプシーは比較的少ない。

定住生活を選ぶようになったジプシーも増えており、移動を繰り返すジプシーは馬車に代わってキャンピングカーを使うようになった。一九七〇年代にジプシーの地位向上のための世界ジプシー連盟も結成された。ジプシーが民族国家をつくる土地を得ることは難しいだろうが、かれらはジプシーとしての横のつながりを保ちつつ、居住する国に溶け込みつつある。

クルド人はイスラム教を受け入れたが、アラブ化することなく、古くからの山岳での生活で生まれた習俗を守り通していた。

●クルド人分裂の悲劇の種がまかれた

クルド人はイスラム世界で、山岳地帯の勇者の集団として知られていた。そのようなクルド人の中から、アラブ系の小国ザンギー朝に武人として仕えたサラディンが出た。かれはしだいに私兵をたくわえ、エジプトのファティマ朝の衰えにつけ込み、ファティマ朝を倒してアイユーブ朝を興した。一一七一年のことである。

ファティマ朝は、アッバース朝から九六九年に自立して、カイロに都をおいたイスラム系の王朝であった。そこは一〇世紀の全盛期には、東カリフ国といわれたアッバース朝、西カリフ国といわれた後ウマイヤ朝とならんで、中カリフ国といわれて繁栄した。しかし、政治の腐敗がすすんだことにより、簡単に異民族であるクルド人に倒されてしまった。

クルド人の居住地の西半分はサラディンに従ったが、アイユーブ朝は従わなかったクルド人を、武力で制圧しようとは考えなかった。そのため、アイユーブ朝の東方のクルドでは部族の自治が行なわれることになり、そこはクルディスタンとよばれた。このことが、

クルド人の多い地域



(参考:『民族世界地図』浅井信雄、新潮社刊)

問題の解決がはかられるようになった。

クルド人の総人口は八〇〇万人とも二五〇〇万人ともいわれる。トルコ人がクルド人を「山岳トルコ人」とよぶように、かれらが居住する国を支配する民族がクルド人の存在を認めながらも、クルド人の正確な数がわからないのである。クルド人はイスラム教成立以前から、小アジアとイラン高原との間で、部族単位の生活を営んでいた。七世紀以降

した。その中には、クルド人国家の建設も明記されていた。

ところが、ケマル・パシャが一九二二年に、オスマン帝国を倒してトルコ共和国をたてたときに、セーブル条約は破棄され、クルド国家は幻に終わった。

このあとクルド人は各自が居住する国で長期にわたって異分子扱いされることになった。クルド人のそのことに対する不満が、近年になってようやく国際社会に知られ、クルド人

ルコとペルシアの係争地になってしまった。この時点で、クルド人はトルコ文化圏の住民とイラン文化圏の住民とに分断されたことになる。

●三国で繰り広げられるクルド人の独立運動

前にも述べたように、第一次世界大戦後の国境の線引きにより、クルド人は五か国に分断された。そして、現在トルコに二八〇万人以上、イラクに二五〇万人以上、イランに二三〇万人以上のクルド人がいるといわれる。イラクでは、全人口の二〇パーセント近くがクルド人になる。

現在、トルコ、イラク、イランの三つの国でそれぞれのクルド人の集団が、別々に独自の独立運動を繰り広げている。なかでもイラクのクルド人の自治拡大の運動が激しい。

一九六〇年代末から一九七〇年代半ばにかけて、クルド人とイラク政府軍との内戦が起こっている。これは、イラクと対立するイランがクルド人に武器を与えたために生じたものである。トルコでも、クルド人組織と政府軍との衝突がしきりに起きている。

クルドの民族自決を求める声は強いが、現在のところトルコ、イラク、イラン三国のクルド人組織の足並みがそろわないため、その動きは先がみえない状況である。

12世紀末頃のアラビア周辺



クルド人分裂の悲劇につながった。

サラディンは、アラブ世界に侵入した十字軍とよく戦った。しかし、アイユーブ朝の王族の間で領土の分割相続がなされたため、アイユーブ朝は早く衰え、一二五〇年に倒れた。

これは、アイユーブ朝に仕えたトルコ族の武人がしだいに実権を握り、前王朝に代わったことによるものである。エジプトにトルコ系のマムルーク朝がつくられたことにより、そのクルド人は故郷の山岳地帯に帰ることになった。

これから間もなく、オスマントルコの成長がはじまった。かれらはクルド人の居住地にも手を伸ばしてきた。そして、一七世紀にはイラン高原のサファヴィ朝ペルシアも発展した。これによって、クルド人の居住地とその周辺は、ト

南米の人種と民族



● 大国による国境の線引き

コロンブスのアメリカ発見のあと、スペインとポルトガルのアメリカ進出がさかんになった。そして、この両国がともにカトリックできわめて親密な関係にあったため、一四九四年にローマ教皇の仲介でトルデシリヤス条約が結ばれた。それは地球を二つに割って、それをスペインの勢力圏とポルトガルの勢力圏とに分割するものであった。そして、一五〇〇年にカブラルがブラジルを発見したとき、この条約により、そこはポルトガルに属するとされた。

これ以後、ポルトガルはブラジル、スペインは太平洋側の植民地経営を行なった。一八世紀後半のラテンアメリカをみると、両国の勢力圏が明らかに分かれているありさまがわかる。この時点では大西洋側のブラジルが先進地であり、スペインは南米よりメキシコを重んじていた。アメリカの成長をみて、一九世紀のは

南米諸国の均質的な文化は どのように作られたか

●南米の人種分布からわかることは？

中南米はラテンアメリカともよばれる。これは、そこがラテン系のスペイン人とポルトガル人によって開発されたことにもとづくものである。

しかもスペインの言語、文化とポルトガルのそれとはきわめて近い。日本の東京圏と関西圏程度の違いである。ゆえに、南米ではきわめて均質な南欧風文化がつくられることになった。

南アメリカの人種の分布をみると、ヨーロッパ系の人々が海岸部に、先住民であるインディオが奥地にいることがわかる。そして、その中間に多くの混血の人々がいる。このことは、南アメリカが海岸部分からひらけたありさまを物語るが、いまでもその重要な都市は海岸部に集中している。

た。その広さは、エクアドル全体の約半分近くもあつた。これによりペルーとエクアドルとの全面戦争になる可能性もあつたが、戦いになればエクアドルが不利なのは明白だった。そこで翌一九四二年に、エクアドルはリオ・デ・ジャネイロ議定書にしぶしぶ調印し、その土地をペルーに譲りわたした。

ところが、その議定書の中のオリエンテに属するコンドル山脈地区の国境線があいまいであつた。そして、コンドル山脈に金や原油が埋蔵されているらしいといわれたことにより、エクアドルがコンドル山脈全体を自領にしようと考えはじめた。

そのため一九九五年から幾度か、エクアドル軍がペルー領のコンドル山脈に侵入した。その紛争は、ようやく一九九八年の両国の合意でおさまつたが、再燃するおそれも大きい。こういった事態の背景には、両国の係争地であるオリエンテの住民が一方の国への帰属意識が弱く、どちらに属しても大して変わらないと考えている点がある。

これは、南アメリカに属するペルーとエクアドルとの文化や習俗がたいして違わないことや、いずれの国でも少数の支配層が経済力を独占していることからくるものである。その地の民衆は、ペルーの支配層もエクアドルの支配層も自分たちの保護者ではなく、富の略奪者と考えているのである。

南米諸国の独立



南米大陸の勢力図(18C後半)



じめに南アメリカの国々は、つぎつぎに独立していった。

そして、それ以後、南米諸国は本国であったスペイン、ポルトガルとの関係よりアメリカとの関係を強めていくことになった。

しかし、この時期に定められた国境は、当時の力関係にもとづくものであり、南米の国々がおのおの、各国独自の文化をもつ民族として自立していたわけではなかった。

このことが、今日にいたるまで、多くの紛争のもとになっている。

●ペルー・エクアドル紛争の背景とは

一九四一年、ペルーは武力で、隣国のエクアドルからオリエンテとよばれる平地帯を奪つ

プトレマイオス朝の頃の世界



プトレマイオス朝は、南シリアを領有し、地中海世界とインド、アラビアとの仲介貿易で利益を上げた。

そのため、プトレマイオス朝の首都アレクサンドリアは国際都市として大いに栄えた。

●なぜローマ帝国に侵略されたのか

プトレマイオス朝は、文化の育成につとめたが、その軍事力は比較的弱かった。そのため、ローマの急成長のなかで、しだいにローマの軍事的援助を求めなければならなくなった。プトレマイオス朝最後の君主が、クレオパトラ七世である。

彼女の時代にローマでは、シーザーの後継者の地位をめぐって、アントニウスとオクタヴィ

幾度もの侵略によつて エジプトはどう変わつていったのか

●プトレマイオス朝の繁栄がもたらしたもの

ナイル河の流域にひらけたエジプトでは、早くから農業が栄え、古代文化が發展した。その諸王朝は、長期にわたつてオリエントの強国としてつづいたが、アレクサンダー大王の征服により、はじめてエジプト人は異民族支配を受けることになった。

アレクサンダーの没後、武将の一人プトレマイオス一世がエジプト太守となった。そして、紀元前三〇五年になつてかれは王位につく。

このとき、王は古代エジプトのファラオの完全な後継者であるとされた。これによつて古代エジプトの儀礼がプトレマイオス朝に受け継がれることになるが、プトレマイオス朝のもとでエジプト文化とギリシア文化との融合がすすんだ。

とくに、ギリシア哲学から受け継いだ古代科学が、エジプトでは大いに重んじられた。

紀半ばにカイロを本拠とするファティマ朝が興り、エジプトを独立させた。そして、いくつかの王朝交代の後、一五一七年にエジプトはオスマントルコに征服された。

このあとヨーロッパ勢力の進出がはじまった。フランスのナポレオンが一七九八年に、エジプト遠征を行なったのがそのはじまりで、イギリスもエジプトの交通の便に目をつけ、しばしばそこに出兵した。

一九世紀はじめにエジプトは、大守ムハンマド・アリーのもとで近代化をすすめた。そのころのエジプトは、形のうえではオスマントルコの支配下のもとにあつたが、大守が治める自治領に近い形になっていた。

ついで、オスマントルコの後退に乗じたイギリスが、エジプトの財政難につけ込み、エジプトを保護下におくにいたつた。そして、一九五二年のナセルのエジプト革命により、エジプトは独立を果たした。世界最古の文明を育て、さまざまな民族の支配を経験したこ

とによつて、エジプトでは独自の文化が育つていった。古代エジプト、ローマ、イスラム、近代イギリスなどの諸文化がそこで融合したのである。

この文化を背景に、エジプトの人々は自国こそアラブの先進地であるとする誇りを強くもっている。

アヌスとが争っていた。クレオパトラはアントニウスの力を借りて国内の政敵を抑えようとした。それに対し、オクタヴィアヌスが攻撃をしかけてきたため、アクティウムの海戦が起こった。この海戦でアントニウスが敗れたことによつて、エジプトはローマの属領となった。そして、ローマ帝国が東西に分裂したのちに、エジプトはビザンツ（東ローマ）帝国の支配下におかれた。

ローマ支配のもとで、エジプト古来の宗教は禁止され、コプト教とよばれるエジプト独自のキリスト教が広められた。

●イスラム勢力、イギリスによる侵略

六四一年にイスラム軍が、ビザンツ帝国からエジプトを奪った。エジプト人はこれをファトス（開くこと）とよんでいる。これにより、エジプトのアラブ化がはじまった。一四世紀ごろには、エジプト人の約九〇パーセントがイスラム教徒になり、コプト教徒は一〇パーセント程度だったといわれる。

エジプトはじめはバグダードに本拠をおくイスラム勢力の支配を受けた。そして正統カリフ、ウマイヤ朝、アッバース朝が、つぎつぎにエジプトを治めたのであるが、一〇世

15世紀前半のアジア



流域のアストラカン・ハン国が自立した。これによって、キプチャク・ハン国の衰退は決定的になった。

●「クリミア・タタール人」の誕生

クリミア・ハン国の誕生は一四三〇年ごろではなかったかといわれている。その国は、北方と東方とからの連絡口として黒海にいたる重要な位置を占めていた。

そのため、クリミア・ハン国は、ジェノバ（商業で栄えたイタリアの都市国家）の植民地であるカッファと友好関係を保ちながら、商業を育成していった。

クリミア・ハン国の二代目の君主メングリ・ギレイは一四七五年にオスマントルコの保護下

大国ロシア支配がもたらした タタール人の悲劇とは

●ロシアに拡大したモンゴル勢力

今日のロシアでクリミア独立問題が騒がれているが、そのもとを辿^{たど}っていくとチンギス・ハンの征服活動までいきつく。黒海とアゾフ海との間のクリミア半島が交通の要衝であったために、そこでさまざまな民族問題が起こったのである。

チンギス・ハンの征服活動をもとに生まれた元朝と四汗国のうちで、もつとも長命であったのが、南ロシアのキプチャク・ハン国であった。一三世紀半ばに誕生したキプチャク・ハン国は、一四世紀半ばすぎに王族の内紛の激化とチムールの侵入によって大きく後退した。

そして、一五世紀はじめにヴォルガ中流域のカザン・ハン国とクリミア半島のクリミア・ハン国とがキプチャク・ハン国から自立した。さらに一五世紀半ばに、ドン・ヴォルガ下

ロシア帝国の南下 (17C前半)



●ロシアによる併合が引き起こした民族問題

ロシアのクリミア併合以来、ロシア人のクリミア半島への移住がさかんになった。ロシア革命のあとの一九二一年に、クリミア自治共和国がソビエト連邦の一員として自立した。

しかし、第二次世界大戦時に、クリミア・タール人がドイツに協力したと非難される事件が起きた。

そのため、一九四四年にタール人はウズベキスタンに強制移住させられ、代わりにロシア人やウクライナ人が入植してきた。クリミア自治共和国は、一九四五年にロシアの中のクリミア州に格下げになり、一九五四年にクリミア州はロシアからウクライナ共和国に与えられた。ソビエト連邦の崩壊前後から、ウズベキスタ

に入った。そして、モスクワ公国のイヴァン三世と結んで、一五〇二年にキプチャク・ハン国を滅ぼした。

この時期のロシアの成長はめざましく、一五五二年にはカザン・ハン国が、一五五四年にはアストラカン・ハン国がロシアに併合されている。そのころクリミア・ハン国では、しだいにイスラム化がすすんだ。

モンゴル人は、それ以前にはチベットで起こったラマ教を信仰していた。これに対し、クリミア・ハン国のモンゴル人は、イスラム化し交易民としての性格をもつようになった。そのために、もとのモンゴル人と区別する意味で、かれらは「クリミア・タタール人」とよばれるようになった。

クリミア・ハン国は、二〇〇年以上にわたって、オスマントルコとの友好関係を保ちつつ、トルコとロシアとの緩衝地帯かんしゅうちほうの役割を果たした。

そして、ロシアとトルコとの力関係でロシアが優位に立った一七八三年に、クリミア・ハン国は、ロシアに併合された。

そのころ、ロシアは南下政策をすすめており、この前後に西トルキスタンがつつぎにロシア領に組み入れられている。



今に続く民族紛争の火種を
世界地図から読み解く

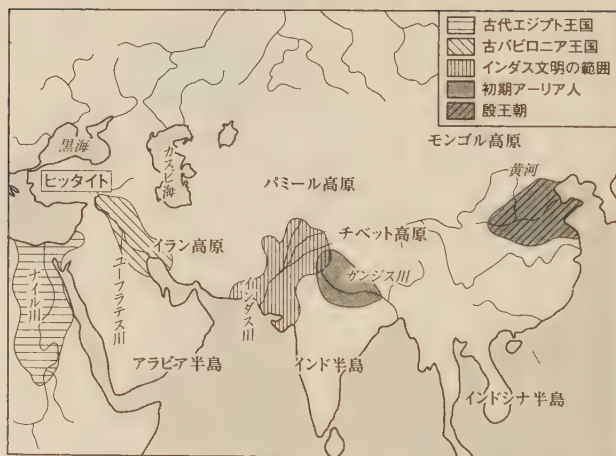
ンに移されたタタール人の間で、帰還運動が高まってきた。しかし、この時期クリミアにもどったタタール人は、市民権を与えられずに差別を受けた。

現在クリミアの人口の約三分の二がロシア人で、ウクライナ人が約二五パーセントで、タタール人は一〇パーセン余りにすぎない。

一九九一年にウクライナがソビエト連邦から独立し、一九九二年にはクリミア共和国が独立宣言を出した。これは、そのロシア人がウクライナに従うことを好まなかったことによるものである。ところが、その宣言はウクライナの圧力で破棄された。

これ以後、クリミアでは三つ巴の対立がつづいている。クリミア・タタール国家を望むタタール人と、ロシア編入を求めるロシア人と、現状維持を望むウクライナ人との間の紛争である。

前20世紀頃の世界



なくなり、科学の発展が人類を誤った方向に導きかねないからである。

かつて世界中の人間が、二〇〇〇〜三〇〇〇人程度の血縁集団を単位に行動していたと思われる。その血縁集団がいくつか集まったゆるいまとまりとしての部族はあったが、部族が個々の血縁集団のあり方を拘束することはなかった。

ところが、世界のあちこちで周囲の部族より高い文化をもつ部族があらわれて、まわりの部族を従え、自己に同化させはじめた。これによって民族が生まれた。そして、民族の拡大の中で相接する民族間の対立が起こった。

ネコの集団の中に、突然トラに進化したネコが出現する。そしてネコたちを自分の家来にする。こういった図式を考えるとわかりやすい。

民族対立の歴史は どのようなにつくられたのか

●民族と国家の発生理由

人類は、三五〇〇年もしくは四〇〇〇年余りにわたって、民族の対立を繰り返してきた。しかし、そのことを否定的にのみみるべきではない。

民族間の対立があればこそ、今日までの域に文化を高めてきたともいえる。部族が孤立している限り、平和は保たれるが向上にはつながらない。あらゆる民族が、競争者である他民族より高い文化をもとうと努力し、他の民族にうちかつために軍事力を強めようとつとめてきた。

また、どの民族の文化も、異文化と交流することによって発展してきた。現在、世界中の人々が、近代科学を共通の価値あるものとして重んじる時代になっているが、これは大いに危険である。近代科学に対立する価値観がなければ、近代科学の暴走に歯止めがきか

れは、アーリア人の血をより多く受け継ぐ、色の比較的白い人間を上位におき、ドラヴィ
ラ人の系統をひく比較的色の黒い人間を下位におくものであった。カーストとは、本来は
「色」をあらわす言葉である。

古代の民族国家がつくられる過程で、どの民族でもインドのカースト制度のような身分
制度がつくられている。それは、民族統一の中心となった集団の子孫が、他の集団の系譜
をひく人々を支配するためのものであった。

●古代オリエントの民族対立とは

エジプトとメソポタミアとが比較的近い位置にあったために、古代オリエントでは他の
地域に先駆けて国家が生まれた。紀元前二〇〇〇年ごろのそこには、エジプト人、バビロ
ニア人のほかに、ヒッタイト人、ギリシア人といったすすんだ文明をもった人々がいた。

そして、紀元前一五〇〇年ごろに、オリエントは国家間の抗争の時代に入る。境界を接す
る古バビロニア王国、ミタンニ王国、ヒッタイト王国、エジプト王国の間で、日常的に戦
争が行なわれ、国々はしきりに領土のとり合いをした（前ページの地図参照）。

そして、いったんそういった強者の支配下に組み込まれた弱小民族も、自立化の動きを

前15世紀頃のオリエント世界



それは、当時の先進地である黄河流域、インダス川流域、メソポタミア、エジプトでまず発生した。漢民族のもとになったのが、黄河文明をひらいた人々で、そこに興った殷朝の甲骨文字が漢字の原形になっている。

インダス文明をひらいたのはドラヴィダ人だといわれるが、かれらは後にガンジス川流域に南下してきたアーリア人に追われて南インドに移った。アーリア人とドラヴィダ人との混血もなされた。このため古代のアーリア人の諸王朝は、カースト制度をつくった。そ

日本を例にとると、大和朝廷がトラにあたることになる。

民族は自然にできるものではない。その核となる集団のはたらきかけによってつくられるのである。

●四大文明はいつどこで起こったか

紀元前二〇〇〇年ごろに、世界各地で民族の勃興がみられた(前ページの地図参照)。

フツ族とツチ族の 果てしない戦いの理由

●少数民族が多数派民族を支配する国

アフリカのルワンダは、支配層を構成する少数のツチ族と、多数のフツ族とから成る国である。ツチ族の人口がルワンダのその約一〇パーセントにすぎないのに、フツ族は全人口の九〇パーセントを占めている。少数の民族が、圧倒的多数の異民族を支配しているのであるから、民族対立が起きないわけがない。

ツチ族とフツ族とは、長期にわたって対立してきたが、一九九四年の多数派フツ族の民兵によるツチ族の大量虐殺は、世界中を驚かせた。かれらは近代兵器をもたず、オノ、カマ、こん棒といった身近なもので、誰かれかまわずツチ族を殺しまくったのだった。この事件による死者は五〇万人とも八〇万人ともいわれる。ある人気者のディスクジョッキーが、ラジオで「ツチ族を殺せ」と扇動したことが、虐殺のきっかけになったといわれる。

みせた。エジプト支配下にあつたユダヤ民族が紀元前一一世紀終わりにヘブライ王国をつくつたのは、その一例である。このヘブライ王国は、紀元前一〇世紀にイスラエル王国とユダ王国に分裂して衰退した。

そのあと、イスラエル王国はアッシリアの侵略を受けて滅び、ユダ王国は新バビロニアに併合された。ユダ王国の支配層はバビロニアに強制移住させられたが、バビロニア滅亡後にパレスチナへの帰還を許されている。かれらの中に今日のイスラエル人の先祖にあたる者もいる。

ヒッタイト、ミタンニ、バビロニアが支配していた地域は、紀元前六世紀にアケメネス朝ペルシアによつて統一されることになる。オリエントの国家間の抗争が、ギリシアやペルシアにも影響を与え、かれらの民族的統一の動きを早めたのである。

アケメネス朝は、メソポタミア方面からの侵略を恐れ、西アジアの人々が団結してオリエントの勢力に対抗することをもくろんだ。

そして、ポリスとよばれる小規模な都市国家を営んでいたギリシア人も、ペルシアの侵略をきっかけに民族的なまとまりをつくり上げていった。

アフリカの分割(19C後半)



●ルワンダ王国から植民地時代まで

今日のツチ族とフツ族との争いのもとを探っていくと、一五世紀の小王国であるルワンダ王国ができたいきさつに行き着く。ルワンダの記録には、北方からブウィンバという族長が多数のツチ族を率いて移住し、先住の農耕民フツ族を支配して王国をたてたとある。一九世紀末に、ヨーロッパ列強の協定により、ルワンダはドイツの勢力圏とされた。そ

のため、一八九九年にルワンダ王はドイツに屈伏し、ルワンダはドイツ領東アフリカの中のルワンダ・ブルンジ植民地の一部となった。そして、第一次世界大戦後、ルワンダ・ブルンジはベルギーの、そして東アフリカの他の部分はいギリスの委任統治領とされた。植民地支配の時期に、ドイツもベルギーも、ルワンダの王制と特権階級である少数派ツチ族の支配を残し、間

アフリカ大陸の国々



しかし、内戦後に逮捕されたかれは、そんなことは言わなかったと供述した。

このルワンダ内戦は、「武器業者が政治家に金をばらまいて戦争を起こし、善良な民衆を無理やり兵士にして戦場に送り込む」という、ベトナム反戦運動や、七〇年安保の中で植えつけられた私たちの常識をくつがえすものであった。武器業者の介在がなくても戦いは起きるのだ。

大量虐殺事件後まもなく、少数派であるツチ族が盛り返して政権を握った。このために、ツチ族の報復を恐れる多数派の人数は二百数十万人に及んだ。ルワンダの人口が八〇〇万人余りだから、その約三分の一が住むところを失ったことになる。このツチ族の難民の数は、少数派であるツチ族の総人口よりはるかに多い。

なぜ中国は チベットの独立を認めないのか

●漢族とチベット人との対立

チベット高原は、ヒマラヤ山脈の北側、崑崙山脈こんろんの南側にある広大な山地である。そこは、現在チベット自治区として中国の一部になっている。

その人々は、チベット語を話し、チベット仏教を信仰する。漢族とは明らかに異なる文化をもつ人々である。一九五〇年代末から、チベットの独立運動はさかんになったが、中国はその分離独立を認めようとしなない。

国際世論が非難しても、中国はそれを内政問題として諸外国の口出しを認めない。かれらは、もしチベットの独立を認めれば、他の少数民族の自立の動きが高まると考えているのである。

今日の中国で、漢族の政権に対する反発がもつとも強いのがチベットなのである。

接統治によりルワンダを治めた。これといった目立つた鉱物資源がなく、牧畜程度の産業しかみられないルワンダを、かれらが重視しなかったためである。

●民族紛争が長期化するわけ

一九五九年に、ツチ族のムワミ王という有力な王が亡くなった。これにより、多数派であるフツ族が政権を握り、少数派のツチ族の排除策をとりはじめた。フツ族は、一九六二年にはベルギーから独立してルワンダ共和国をたて、王制を廃した。

これに対し、ブルンジに避難していた少数派のツチ族の首長が、一九六三年に反攻に出た。これの報復として、政府は国内にいるツチ族約一万人を殺害した。このとき、一〇万人余りのツチ族が難民となった。

このあと、少数派ツチ族の反撃がはじまる。かれらがルワンダ愛国戦線(FRP)を結成して、政権回復をもくろんだのだ。そして政府とFRPとの長期にわたる内戦のあと、前に述べたように、一九九四年にツチ族が勝ち、多数のフツ族が国を追われた。そのため、現在でもルワンダの多数派であるフツ族による反政府活動がつづいている。この紛争が解決に向かう兆しは、いまのところない。

烏斯蔵の周辺



て、一三世紀半ばに、チベットはモンゴルの支配を受けることになった。ラマ僧パspaが元朝のフビライの師となったことをきっかけに、ラマ教がモンゴル人の間に広まり、ラマ教の教団は元朝から多くの特権を与えられた。

元朝の衰退ののち、チベットは独立した。そこは明朝から烏欺蔵^{ウチツァン}とよばれたが、その時代のチベットではいくつかの小勢力が分立していた。この混乱の中で、チベット仏教の一派である黄帽派ラマ教が成長していった。

一七世紀半ばに、ラマ教の指導者であるダライ・ラマ五世が出て、チベット仏教諸派を黄帽派ラマ教のもとに統一した。かれは、青海(チベットの東北にある中国の青海省)のオイラート(モンゴル系の部族)の族長グシ・ハンの援助を受けて、チベット高原を武力で統一した。

これにより、ダライ・ラマが代々、チベット

吐蕃の領土



●チベットの起源と繁栄の歴史

チベット高原の人々は、中国人から古くからてい氏ときよう羌とよばれ、西方の有力な異民族として恐れられていた。氏、羌の一部は、中国の南北朝時代に中国北部に侵入して、いくつかの国をたてて活躍している。

チベット高原は、七世紀はじめにソンツェン・ガンポによって統一された。かれが起こした王国は中国から吐蕃とばんとよばれている。

吐蕃は、東西の通商路をにぎり、国内の官制や軍制の整備につとめた。そして、八世紀半ばから仏教の国教化がなされた。これによってつくられたチベット仏教は、ラマ教ともよばれる。チベット固有の信仰をとりこんだ独自のものである。

この吐蕃は、九世紀半ばに南北に分裂し、その後衰退していった。この後、チベット高原では多くの諸侯が分立し、かれらの手によってチベット仏教の各派がつくられた。そし

多民族国家ならではの インドネシアの苦悩とは

●インドネシアの混乱の原因

一九九九年に東ティモール独立をめぐる混乱があつたが、インドネシア国内にはそれだけではなく、いくつもの独立運動がみられる。それらの多くは、ジャワ族支配に対する反発から生じたものであるといわれる。

インドネシアは、マレー半島とニューギニアとの間の約五〇〇〇キロメートルにわたつてつらなる無数の島々から成る。これだけ広大な地域が一つにまとまること自体、不自然なのであろう。

南太平洋には、孤立した島々から成る小規模な国家がいくつもある。それゆえ、少数民族が一つの島を単位にそれぞれ独立するのが自然なように思えるのである。インドネシアとしてのまとまりは、どのようないきさつでつくられたのであろうか。

全土にわたって聖俗両方の支配権をもつようになった。そして、その後の清朝の侵入によって、チベットはダライ・ラマを君主としながら清朝の軍事的支配下におかれる形がつくられた。

●地図から読むチベットの独立運動

チベットは清朝が衰退した一九世紀末に独立を企てたが、それはイギリスの介入によって失敗に終わった。中国革命後の混乱の中でも、チベットの独立宣言が出されたが、それはイギリスなど列強に認められなかった。

そして、第二次世界大戦後、中国共産党によるチベットの軍事制圧がなされた。これによって一九五一年にチベットが中国の自治区の一つになった。

しかし、その後、チベットの独立運動が高まると、中国政府はダライ・ラマにさまざまな圧力をかけるようになった。そこで、ダライ・ラマ十四世はインドに亡命し、インド北部のダラムサラに亡命政府をつくり、現在にいたるまでチベット独立をめざす運動をつづけている。

われる。

シューリーヴィジャヤ王国が衰退していくなかで、ジャワ島を本拠とするマジャパヒト王国が力を伸ばした。マジャパヒト王国は、最盛期にはマレー半島やフィリピンの一部まで押さえたが、一六世紀はじめに滅んだ。この王国も、貿易権を通じて諸部族を治めるものであった。

そして一六世紀以降、インドネシアではイスラム系の小勢力が分立する形がつくられていった。そのなかで、すぐれた商船をもつヨーロッパ人が貿易を握るようになった。

●オランダ支配とジャワ族の軍事支配

インドネシア各地に拠点をおいていたオランダは、二〇世紀はじめにスマトラやセレベスの奥地まで得て、オランダ領東インド植民地を組織した。このとき、北ボルネオはイギリス領、東ティモールはポルトガル領であった。

北ボルネオは第二次世界大戦後、マレーシアやブルネイとなったが、東ティモールはインドネシアに武力で併合された。

オランダ人は、ジャワ島のバタヴィア（今のジャカルタ）に拠点をおき、ジャワ族を官僚

シューリーヴィジャヤ王国の領土



● シューリーヴィジャヤ王国が繁栄した理由とは

インドネシアがまとまりをみせるようになった時期は、思いのほか古い。七世紀から一四世紀にかけて、インドネシアの主要部を押さえたシューリーヴィジャヤ王国までさかのぼるのだ。

王国はスマトラのパレンパンに本拠をおき、東南アジアの貿易路を押さえて発展した。そして、インドとの交流によって大乘仏教を取り入れた。

唐僧義浄はインドにおもむく途中にここを訪れて、この国は東南アジアの大乗仏教の中心地であると伝えている。

ヤヤ王国の領域はマレー半島南部やフィリピンと台湾の一部にまで広がった。しかし、その王国の支配は諸部族の自治のうえに成り立ったものであり、シューリーヴィジャヤ王は貿易権を独占し、その利益を分け与えることを通じて支配下の諸集団をまとめていたと思

西トルキスタンとカフカスに見る ソビエト連邦が残した民族問題

●諸民族とロシア人との紛争

一九九〇年に、ソビエト連邦が解体した。これによって、かつて連邦の構成員であった各共和国は独立することになった。これは、かれらがロシア人が主導権をもつ共産党の支配を離れることを意味した。

ソビエト連邦は、ヨーロッパからアジアにわたる広い国内を、ロシア共和国と一三の共和国との一四の区域に分けることによって民族問題をそらしてきた。一三の共和国は、西トルキスタン、ウズベク地方、ロシア西方に集中している。西トルキスタンには、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンがある。

そして、カフカス地方にグルジア、アルメニア、アゼルバイジャンがおかれた。さらにエストニア、ラトビア、リトアニア、白ロシア、ウクライナがロシアの西方にある。

オランダ領東インドとチモール



などに起用し、インドネシア全土を治めた。第二次大戦後、インドネシアは独立したが、それはジャワ族がオランダ人を追い出したものにすぎない。

その後、ジャワ族による軍事支配がなされ、地方の自治や文化が抑圧され、教育の場で長期間にわたってジャワ族の風習の押しつけがなされた。

このようなジャワ族支配は一九九八年に揺らぐことになった。三〇年間にわたって独裁政治を行なったスハルトが学生運動などによって退陣に追い込まれたからである。

これを機に、各地で自治や独立を求める声が高まり、現在にいたっている。

東ティモールが、一九九九年の住民投票にもとづいて独立宣言を発したのは、その一例である。つぎに独立するのは、イリアン・ジャヤ（ニューギニア西部）ではないかといわれている。

チムール帝国の領土



力であつた。

ここにあげたウズベク族の三つの国は、一九世紀末にロシアに併合されるか、ロシアの保護領になった。そして、ロシア革命後の一九二四年に、トルコ系の人々を集めたウズベク共和国がつくられた。この共和国の最大の都市がサマルカンドである。そして、ウズベク共和国がウズベキスタンになった。

現在のウズベキスタンで、中央アジアに散つたウズベク族を集めて大ウズベク国家をつくろうとする動きがあるため、周囲の国々はウズベキスタンに反発している。さらに、政府がイスラム原理主義を弾圧したため、大ウズベク主義とイスラム原理主義との対立が激化している。

このイスラム原理主義は、原初のイスラム教

ロシア革命後の革命政權は、ロシア領内諸民族が完全な民族自決權をもつと唱えたが、ソビエト連邦を政治的、經濟的に支配したのはロシア人であつた。そして、ソビエト連邦の解体がロシア系ではない民族から成る共和国に多くの紛争をもたらしことになった。

共和国の民族対立が噴き出したうえに、共和国の間で国境線の線引きをめぐる紛争が生じたためである。現在のところ、比較的新しい時期にロシア帝国に征服された西トルキスタンと、多民族が雜居するカフカス地方での民族問題がとくに目立っている。

●ウズベキスタンとタジキスタンの勢力対立

西トルキスタンにあるウズベキスタンはトルコ系ウズベク族の国である。ウズベク族は、自分たちはチムールの子孫であると唱えている。チムールは一四世紀末にサマルカンドに都をおいて、中央アジアから西アジアにいたる大帝國をつくつた英雄である。

しかし、チムールは實際はモンゴル族の出であることが確認されている。一五〇〇年にチムール帝國を倒し西トルキスタンを奪つたのがウズベク族である。

ウズベク族は一六世紀に、ヒヴァン・ハン國、ボハラ・ハン國、コーカンド・ハン國をたてた。この中で、東西交通の要衝サマルカンドを支配するボハラ・ハン國がもつとも有

●ロシアによるグルジア、チェチェンへの弾圧とは

カフカスにはさまざまな民族が雑居する。この中のグルジア人はきわめて古くからカフカスに居住した民族で、コーカソイド（白人）であるが、スラブ人ともトルコ人とも異なる、カフカス語系の孤立した民族である。

グルジア人は、四世紀にキリスト教を受け入れ、後にグルジア正教会としてまとまる。そして、一二世紀にグルジア王国がつくられるが、そこは一九世紀にロシアに併合された。ロシアはカフカス語系の諸民族に、ロシア化政策を行なった。その反発が、ソビエト連邦解体後独立したグルジアの反ロシア政策となつてあらわれた。

ところが、ロシアとの関係の悪化が、経済の行きづまりをもたらし、これにより、グルジアの中の南オセチア自治州とアブハジア自治共和国でグルジアからの分離を求める声が起こり、グルジア政府と激しい争いになっている。

チェチェン共和国は、イスラム系のチェチェン人の国である。その人々はロシアからの独立を強く求めているが、ロシアはチェチェンを支配することによって得る石油と天然ガスの利益を手放すまいとして、独立運動を弾圧している。

ロシア帝国の支配が生み出した民族問題は、これ以外にも多い。

ウズベク族の国とグルジア



への回帰を説くものである。

しかし、その考えをつきつめていくと、異教徒とある程度妥協して国家をまとめている今日のイスラム系国家の指導者すべてが、墮落したイスラム教徒になってしまう。

ウズベキスタンの隣のタジキスタンは、タジク人の国である。

トルコ系民族の多い西トルキスタンにいますが、タジク人はイランからアフガニスタンをへて広がったイラン系民族である。

タジキスタンでは、少数のロシア人が経済的に主導権をにぎっている。そのため、国内ではロシア支配のままでタジキスタンの体制を維持しようとする勢力と、タジク人のための独立国タジキスタンをつくろうとする勢力と、アフガニスタンのタジク人と結合した大タジキスタンを樹立しようとする勢力とが対立している。

の流れの中で自立し、固有の文化を守り通した。

近年になってようやく、「民族自決」が単なる自国を正当化するお題目ではなくなり、全世界規模で、民族の自立が認められるようになってきた。

一つの民族だけに通用する文化も多い。しかし、民族の枠を超えて受け入れられるものもある。そして、情報化がすすむ近代に、人々はさまざまなものを比較し取捨選択して最良のものをみつける。

この営みによって、長い時間をかけて諸国、諸民族の文化が均質化し、共通の世界文明とよぶべきものがつくられていくのであろう。一つの見方として、冷戦後の世界が、2021〜2031ページの図のような八つの文明に分かれているとするものもある。

●「民族」とはいったい何か

これまで「民族」とは何かは、自明なことのようにして話をすすめてきたが、実はこの「民族」という概念は、わかるようでわからないものである。

「民族の研究者は、それぞれ民族について独自の定義をもつ」という言い回しもある。

言語、宗教、文化などを共有するものが民族とされるが、民族の数にしても、前に述べ

なぜ民族は お互い抗争し合うのか

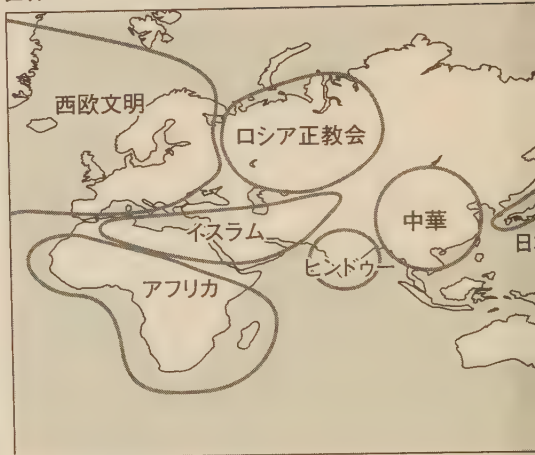
●冷戦後の八つの文明圏とは

世界史をみていくと、それが民族の興亡によってつくられてきたありさまがよくわかる。古代のオリエント世界のアケメネス朝ペルシアの成長が、世界で最初の大規模な民族の統合であるといつてよいだろう。そしてこれによって、新たにペルシア人に加わった者は多い。

そして近代になり、西ヨーロッパ諸国による植民地支配が、世界の民族や文化のあり方を大きく変えた。いまでもアフリカのイギリス文化圏とフランス文化圏とは、異なる様相を呈している。

東アジアの歴史は、近代以前には中国の縮小と拡大によって動かされてきた。そして、そのあとにヨーロッパ列強のアジア進出があるが、中国人は二〇世紀の世界的な民族自決

世界の8つの文明圏



るが、今日のさまざまな政治的、外交的紛争が「民族」の名のもとに行なわれていることは間違いないのである。なお、巻末に第二次世界大戦以降の主な紛争地図を掲載しておいた。

● 民族問題の終結に向けて

「民族」という言葉が、二〇世紀になってしきりに用いられるようになった点にも注目したい。民族の独立、民族紛争といった言葉は、前近代にはみられない。

極端に言えば先進国では、第一次世界大戦まで、強者が弱者を支配するのは当然であると考えられていた。そのような時代には、弱者は強者の文化や宗教、あるいは習俗を受け入れ、まねなければならなくなる。

イギリスの植民地では、キリスト教に改宗した者が優遇された。日本人は、朝鮮半島の

たようにそれを五〇〇〇〇〇〜六〇〇〇〇とするものから一万数千とするものまである。
 一つの確かな見方として、他者との相違を意識することによって、はじめて民族意識が生まれるとするものがある。



他の集団の外圧を受けない限り、人間は民族について深く考えず、周りの者をすべて自分と同じ価値観をもつ人々とみる。

そして、異なる文化、宗教、言語をもつ集団に脅威を感じたときにはじめて、自分と共通する意識をもつ者が「民族」としてまとまり、その脅威に対抗しようとする。ペリーの来航のあと、攘夷主義が高まったのは、その好例である。

パレスチナにしても、ユダヤ国家イスラエルとの対決の中で団結を強めていった。

きわめてとらえづらい「概念」が民族であ

終わりに

世界史を、地図を手がかりにみていくと、これまで多くの民族の興亡があり、いくつかの大国が興り、滅んでいったありさまがわかる。そして、一九世紀末から民族問題にもとづく多くの紛争が生じ、それが現在でもつづいている。

しかし、これから数十年、もしくは百年程度のうちに、世界の民族紛争はおおむね姿を消していくのではないだろうか。それは一つには、異なる民族がお互いの違いを認め、たうえで共存する道を探る形で実現されつつある。互いに受け入れ合うことがないといわれていたイスラエルとパレスチナのイスラム教徒とが、ようやく話し合いのテーブルについた。さらに、一つの国という枠の中で、多様な民族が融合する方向もある。アメリカがその一例であるが、今後は中国やロシアでも、漢族やロシア人と少数民族との協調の道を探らねばなるまい。

戦争によって国境が書き換えられることがなくなり、国境もたいては意味をもたなくなるとき、世界の人々は一つになっていける。国ごとに色分けされた地図が、過去のものになる時代の訪れを願いたい。

人々に日本語を使わせ、日本風の名字を名乗らせ、神社参拝や天皇の写真への拝礼まで強要した。

しかし、民族問題が論じられる現代では、そのような支配は通用しない。人々が「民族」の問題で悩んでいる現代は、前に述べたような世界文化を生み出すための通り道なのである。

たとえば、現在発展途上国から多くの人々がヨーロッパの先進国に働きに出ている。ここではヨーロッパの側が押しつけなくても、かれらは自分たちに必要な先進文化を自国に持ち帰る。

そのような自主的選択が繰り返されたうえで、全世界に共通なものができ上がってくる。とき、民族問題はなくなるのではないかと思われる。

付図・主な紛争地図







夢新書のマスコットは“知の象徴”と
されるフクロウです(マーク:秋山 孝)

世界地図から歴史を読む方法

2001年4月1日 初版発行

2001年5月10日 三刷発行

著者——武光 誠

発行者——若森繁男

発行所——株式会社河出書房新社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話(03)3404-1201(営業)

<http://www.kawade.co.jp/>

企画・編集——株式会社夢の設計社

〒162-0801 東京都新宿区山吹町261

電話(03)3267-7851(編集)

装幀——印南和磨

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© TAKEMITSU MAKOTO 2001

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。落丁・乱丁はお取り替え致します。
本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除いて禁止されています。
なお、本書についてのお問い合わせは、夢の設計社までお願い致します。

ISBN4-309-50217-2

武光 誠 たけみつ・まこと

1950年、山口県生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。

同大学院博士課程修了。現在、明治学院大学教授。

専攻は日本古代史、歴史哲学。比較文化的視野を用いた

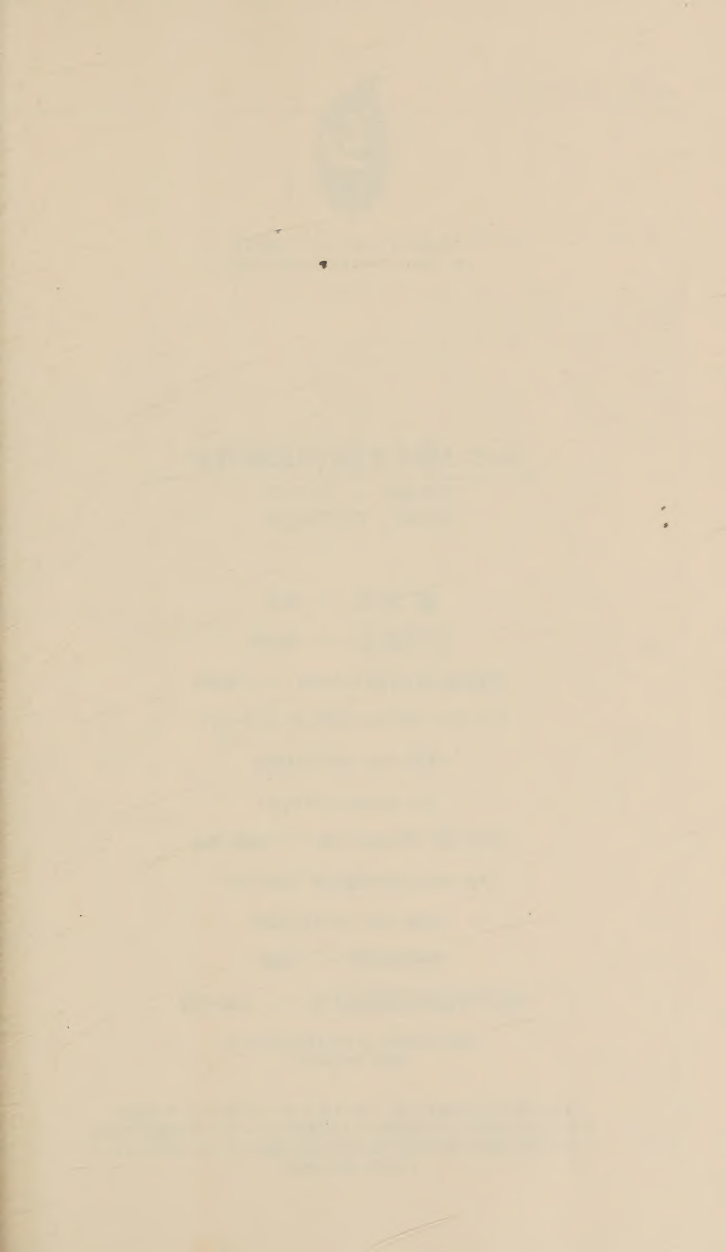
幅広い観点から日本の思想・文化の研究に取り組む一方、

飽くなき探究心で広範な分野にわたる執筆活動を展開している。

『日本地図から歴史を読む方法①②』『地名から歴史を読む方法』

『古代人と巨大建造物の謎』(以上小社刊)

『藩と日本人』『名字と日本人』などの著書がある。





9784309502175

ISBN4-309-50217-2

C0222 ¥667E



1920222006675

定価 本体667円 (税別)



河出書房新社